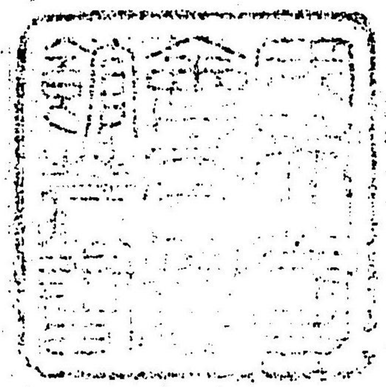
琉球と為朝

菊池幽芳著

文禄堂版

291.99
915.6
Ki167r



221968

余は一昨年一月琉球に遊び、沖縄本島の内地を草鞋がけて跋渉し、更に本島所屬の離島及び宮古八重山の諸島を訪ひ歸航の際は鬼界島にも立寄つて四月に歸つて來た。この一冊子はその土産の一小部分であるに過ぎぬ。

余の琉球漫遊については、奈良原沖縄縣知事を始め、尙侯爵家、和田同縣第四部長、岸本企第二部長、武石那覇警察署長、齋藤島尻郡長その他の諸氏が多大の便宜を與へられた事をこゝに謝する。

明治戊申三月　浪華にて　幽芳生識

琉球と爲朝　目次

じようが越……一
球琉に於ける爲朝舜天の影響……三八
爲朝夫妻舊接の地……五九
運天港＝爲朝の上陸地點……八五
浦添……一五八
結論……一九一

離島めぐり

粟國島……三〇三
渡名喜島……三二五
久米島……二六五
海上の遭難……三〇三
慶良間島……三三一

琉球婦人の歌舞

運天海峡附近のくも林(Cyathea spinulosa, Wall.)

琉球と爲朝

じようが越

（上）幽谷の谺

菊池幽芳

去年の三月二十日、内地は梅の花さへ咲殘るのに、桃の實が蠶豆ほどになつて（尤もこの土地ではついぞ成熟はせぬが）田植が二十日前に濟んだといふ、こゝ琉球名護の春日和。

余は運天の港に爲朝の遺跡を訪ひ、百按司が洞窟に、今も累々たる

髑髏を吊ふべく、國頭役所の仲村君を東道に、朝まだきこの地を立つた。

茅屋の軒に福樹の生垣、草がそのまゝ木になつたかと思はれる、瓜のやうな實のなつた萬壽樹や、内地では盆栽にして居る泰山竹が、三丈四丈と野方圖もなく八方に伸たのや、亭々と中空に羽團扇を擴げたやうな檳榔やに取圍まれた、幾つかの長閑な村を過ぎて、中山五嶽の一たる嘉津宇嶽の裾の方、山入端村といふので、晝食を使つたのが彼是十一時。

名護を出た時から、後になり先になつて居た、十四五人連の琉球人があつた。中に取圍まれた上等兵の服裝をしたのは、日露戰役から凱

旋して歸つて來た名譽の戰士。一行の男女は前日名護まで迎ひに來て居たので、今日は彼が鄕里の渡久地村といふのへ、勇ましく連て歸るのである。それは名護を出る時、無邪氣な一行の默禮を受けたわれ等が尋ねて置たので。

二人が晝食を使つて居る間に、どや〳〵とこの一行は行過ぎた。村人が好意の芭蕉の實に舌打しながら、やをら草鞋の紐を締直して立上る。

安和村から渡久地への途は、嘉津宇嶽の支脈の谿間に入るので、これを名づけて門川越と稱へる。半島の端を斜めに横ぎる間道である。谿間の途は極めて狹い。靑黑に純白の斑の入つた大理石がごろ〳〵

と轉り、緑泥岩もその間に表はれて居て、少し雨が降らうものなら、すぐ谿川にならうといふ、その石の上を飛々に跨いで上るので、勾配がなか〳〵急だ。

大きな悽まじい巖が、横の方からは落かゝつて來て居る。前の方には殺だやうなのが途を塞いで立つて居る。山骨の露出した山が、ひた〳〵と兩肩の邊に迫つて居るので。足場を計るのさへ困難なところが少なくない。その突兀たる石道を琉球の小娘が芝籠を背負つて、徒足のまゝ眞猿のやうに下て來る。われ等二人の蚊帳、毛布、衣類、雨具米、食料品の類を容れた、四個の行李を分ち擔つた二人の人夫も、さつさと平氣なもので上つて行く。

巖には美事な大葉の蘭科植物が絡まつて居て、巖と巖の間には琉球の特有植物の蘇鐵が、内地で見られぬ艶やかな葉色を見せて叢生して居る。椰子屬の桄榔といふのが、孔雀が羽を擴げたやうに葉を伸べて居る。山の峽には葉の細くて長い琉球松が、枝振面白く立つて居る。四邊の光景がすべて熱帶趣味を帶びてるところに面白味がある。

暫らくして谿間のやゝ開けた岨へ出ると、そこに杉の仕立山がある。二尺からやつと二尺五寸廻りの杉が簇がり立つて居るが、某の仕立山と記した杭に年號の入つて居るのを見ると、今から四十七年前に植た苗なのだ。杉は元來中帶の植物で、北海道にも無ければ、また琉球にも自生せぬ。僅かに内地の苗を取寄て仕立たものが、五十年經ても三

尺廻りにならぬのだ。その代り琉球松とか、廣葉杉とかいふものになると内地の二倍も育つ。それは一年に二度芽をふくから。

杉の仕立山を出ると、瞰下す谿間に楠の仕立山がある。三丈四丈の美事な楠が、その天性に反いて、杉の木のやうに眞直にすか〳〵と立つて居る。光線を上に求めるため、横に擴がらずに縱に伸たので、下の方には枝が無い。こんな立派な建築材が内地へ來たら、どれほどの値が出るだらうと驚ろきながら歩を運ぶ。

今度は山が三方から迫つて深い谷間をなして居るところへ出た。削つたやうな一方の山の峽の、水成石灰岩片（大理石質）の磊嵬たるを踏んで、一夫道に當れば、萬夫も進み難き縷のやうなその岨道の、谿

間を縫うて九折になつて居るところを、喘ぎ〳〵上るのである。四十度位の角度をなして居やう。い、按梅に空には雲がかゝつて居る。

凱旋兵の同勢が、谿の一轉した時に、始めて彼方に表はれた。一行十幾人の男女は一列に魚貫して上りつゝある。それが松や雜木に隔てられる。岩鼻に邪魔される。われ等の位置と丁字形をなして見える事もある。一直線に點線を連ねる事もある。

われ等と同じ高さに雲雀が鳴いて居る。羽色の美くしい、綠の帶のある黑玳瑁（蝴蝶）や、鮮やかな紅黃の翅に黑い斑のある豹紋蝶が、ひら〳〵と谿から谿を渡つて行く。浮世の物の音は耳を澄しても聞えぬ。風が吹いても塵一すぢ立たぬ。

かゝる壺中の小天地へ來ても、やはり歩けば暑い事夥だしい。上衣は人夫に預けて縮の襯衣一枚で居るのに、しとゝに汗に濕て了つた。杖に縋つて喘ぎながら立止る。

途端に頭の上の方で、深山の寂寞を破る三筋の絃の音が突如として起つた。續いてこれに和する裂帛の如き甲の聲が湧いた。この思ひがけない音響がどこから來たらうと、塲處は人里離れた山の奥なり、この時この塲合、事の不思議を訝かる刹那、その糸の調と歌の聲がまた後の方から起つた。底事ぞ、振返る間さへも與へず、一谿隔てた左の山に、同じ三味に合はする歌の音色が、時も違へず、雲の彼方で樂を合すかとばかり、またも冴かに響き渡つた。われ等は幽谷の中にあつ

て三絃の響と歌節との中に取卷れたのである。かゝる不思議が世にもあらうか。

魑魅魍魎のなす業か。あらず、ふと見上る行手にわれ等とイの字を描いて、一行の男女が表はれた。三味線の調も歌の音も、まさしくその間から起るのである。いつの間に取出したのか、蛇味線を抱へた二人の男の姿が見える。聲は女共の口から出るのだらう。乙の聲の雜るのは男も和して居るに違ない。

水蒸氣の多い琉球の空氣は、摺鉢の底のやうに迫つた谿間に、山靈を驚ろかして起る三味の音色を、さやかに三方に谺したのである。

いかに微妙の詩を讀んでも、これほどの詩趣を覺ゆる事は出來まい。

余は恍惚となつて聞惚れた。

山越の彼方の里まで聞えるかとばかり、澄徹つた聲音が、谿々の空氣を震動さして骨に浸むやうに耳元に迫つて聞える。琉球の女の聲は、扶桑第一の美聲と知られて居るのである。

歌につれてわれ等の足さへも早くなる。道をいさめの流行ぶし、女どもが聲張上て、

『今日や何やら面影の、目の尾に下とて暮さらぬ。さアさ、我沙汰しゆらど、今時分かまど小が。

『假令一里の道やてん。思れば一足の行戻り、さアさ、他所知れらぬでと、早く行ん、危なさぬ。

『首里からちようしが、かまいちゆた。かまいちゆた。中前の鳴る限やらと思て。さアさ、夜長とさながと、我身立て。んぞなもの。

『今日の御月や晝のごと、照渡て、裏座や暑さぬ居らりらぬ。さアさ、波上毛んぢ遊ばなや、打連れて。

『音に名高さ波上や、波上や、四方の景色や面白さ。さアさ、此處うて眺みて遊ばなや、終夜』

且彈き且歌ひつゝ上るので、これが谿々は歌の音に充渡つた山一ッ彼方の青海原を過る、船人の耳には定めて海姫の歌とも聞えたらう。

件の一行は峠の頂に辿りついた氣配で、糸の調も歌の音もハタと

止み、彼等の影も隱れて了つた。程なくわれ等も頂點の邊名喜へ着て、やをら一息入れやうとすると、いかな事、その頂を狹しと今酒宴の眞最中、渡久地の村からこの頂に出張つて居た十數人の男女が、簞食壺漿して兵士の一行を饗して居るのであつた。

今頂へ上りついたわれ等を見ると、質樸な彼等は敢て路傍の人を以て目しない。慇懃にまたわれ等を要して、芳烈の香に充た泡盛の杯を勸めるのである。乾いた咽喉、疲れた身、呑めぬ口にも一口ほどは心地がよい。まして彼等の好意を無にする事が出來やうか。半盞の酒に陶然として松の切株に腰を下すと、そよ〳〵と涼しい風が、汗になつた肌を掠める。

琉球乙女（下）

前は渺々たる太平洋、右の方手に取るばかり、沖繩一の嘉津宇嶽がさながら火山岩の如き突兀たる輪廓を中空に描いて、そしてその水成石灰岩の露出した半腹の方を、一文字に紫ばんだ水蒸氣で仕切つて居る。いや嘉津宇嶽ばかりではない。つい今來た谿の向にもいつか鼻の先を霞の幕が靉靆いた。丁度谿々に響き渡つた歌の音色を、そのまゝ封じこめて居るかのやうに。

われ等は一行に先つて山を下り始める。これからはだら〳〵と渡久地まで上り下りの峠道が一里半ほど續くので。

併し山が背面になるので、前のやうに嶮しいところは無い。この背面には分壊した水成岩が眞赤な土になつて居て、岩の出て居るところは至つて少なく、松や雜木がまばらに生て、その他には丈ほどの灌木が繁つて居るばかり。

爾く無趣味の山越に此上なき生氣を點じたものは、渡久地に進むこの一里半の間、ひッ切なしにかの凱旋勇士の歡迎者に出遭ふ事であつた。しかもその歡迎者の十中八九までが女なのは、男は野良の仕事に忙がしいからであらう。

梳ば丈に餘るのさへ少なくない髪を——琉球の女の髪は長くて濃いそして毎日梳ては油をつけて居る——無造作に束ねて、紺の匂の高い

本場もの丶紺をひッ張つたのが三人四人と連立つて、いづれも手には泡盛を入れた瓶や、椰子壺を提げ、杯を懷に入て上つて來るので、中には平らな場處を擇んで、そこに待受て居るのもある。併し彼等の中で一人でも男と連立つて來るのは無つた。

東道の仲村君が愛想に兵隊の迎かと聲を掛ると、左なりと答へて、仲村君にも余にもその泡盛を勸める。聲をかけなくても勸めるのがある。勸めなくても勸めたさうにしてゐれ等を目送する。

琉球婦人の酒の勸め方は、内地流に人に杯を持せるのではない。自分が持つた杯へ注だのを、人の口へ當がつて呑せるのだ。それをまた大なる好意の表彰としてある。余は最初大きにまごついた。自分

で杯を持つたのなら加減も出來るが、當がはれては手品の仕樣がない。併しすぐに仲村君の説明を聞いて安心する。それは呑んでも呑ぬでもたゝ口をつけさへすれば滿足するのだといふ。それからは只口をつける事だけに極めて進む。

いくらでもこれ等の歡迎婦人は上つて來る。松の葉越に眞下に彼等を俯瞰す事もある。話し聲で彼等の近づいたのを知る事もある。ひよつくりと不意打を食ふ事もある。大抵皆杯を勸められる。余は酒は呑めぬが、何となく愉快で、自分が歡迎されるやうな氣だ。

だん〳〵下つて山を廻ると、ふと三味線太鼓の陽氣な音が耳に入つた。見下す眼の前にやゝ平坦なところがあつて、そこに日章旗を取卷

いた一團の人の黑い影が見える。行つて見ると三四枚の莚を敷た上に頤髭を長く生した村の長老が、十二三人居流れて、泡盛の杯を擧て居り、その傍には十四五人の琉球乙女が、若衆達の樂器に合して節面白く唄つて居るのであつた。

長老に席を讓られて迷惑しながら、そこ〳〵にこゝを辭してまた山道にさしかゝる。一寸小高い見晴しのところへ來ると、こゝにも羊齒の葉を折敷て、腰を下した十人ばかりの娘の群、これは三味線拔の——琉球の女は娼妓の外は三味線を彈ぬ——手拍子取つて唄ひながら兵隊の來るのを呑氣に待つて居る。多分二三時間は斯うしてこゝに唄つて居たに違ない。

われ等はこれから里へ出るまで歡迎婦人に遭づめである。恐らく渡久地村の女を擧つて歡迎に出たのであらう。余は琉球の兵士を羨やんだ。假へば某の停車場で報効會員の形式的接待を受け、愛國婦人會員の形式的歡迎の下に、一たび散じて了へば、誰一人見返るものもない町中を、淋しく歸る都會の兵士と比べて何といふ相違だらう。

だん〳〵山を下盡して渡久地の人家が見えるやうになると、山の裾から打渡す海岸へかけ、すつかり珊瑚礁で繰付されてある。珊瑚岩のあるところには、大抵濱海植物たる細な朝鮮芝が奇麗に四周に生えて居て、蘇鐵が蒼青に叢生して居る。幾百年の風餐雨打に、蝕ばんだ空洞の多い珊瑚岩が眞黑に化し、何とも云へぬ奇拔な形をなして居て、

そしてそれに蘇鐵の生茂つた風情は、支那畫にも無ければ無論日本畫にもない。實に純乎たる一の琉球趣味を表現して居る。

われ等は此上もない歩くに困難な珊瑚礁の地盤を踏んで、渡久地村へ着たのが二時廻つたころ、今夜はこゝの民家に一泊して明日は今歸仁の今泊まで一泊がけ、明後日はいよ〳〵憧かれた運天の港に、爲朝の遺跡を探るのである。

琉球と爲朝

はしがき

《上》

馬琴の弓張月を讀んで、小供心に琉球は神仙譚の島のやうなところと思ひ込んで居た。それからこの方、琉球と聞くと、いつも春のやうな仙島を、彷彿の間に思ひ浮べる。鎮西八郎爲朝の弓杖ついた面影が幻に立つて、舜天王の凜々しい骨柄、寧王女の繪のやうな姿まで目の前に表はれる。一道の怪氣舊虬山を籠め、朦雲國師が古塚を破つて出ると、これではそつくり弓張月だが、小供の時に始めて覺えた舜天王

の事も、その父が爲朝である事も、架空の話でないと知つた幾歳の昔から、いつかは幻に描いたうるまが島、その黒潮の最中の琉球へ行つて見たいやうな氣がして居た。

去年一月の末つ方、内地は大地さへ凍つく寒空に、薩摩潟沖の小島を後にして、さしかゝる七島沖の夕暮、俄かに起る暴風雨に船橋を越す程の波を被つたのさへ、弓張月に縁があるやうに思はれ、辛く琉球へついてからも爲朝と舜天の事蹟を出來る限り調べて見やうと考へた。それは爲朝の琉球渡來説については、全然これを無する歴史家さへ少なくないので、自分はそれに不平なり、かたゝ肝腎の琉球で如何にこの事が解釋されて居るかも知りたく、遺蹟といふものがあれば、夫

を尋ねても見たかつたからである。

併し余は琉球へ來て頗る失望せざるを得なんだ。それは島は果して繪のやうな島であつたけれども、いつも木の葉は翠、花は紅に塵さへ立ぬ麗はしの里であつたけれども、爲朝舜天の事蹟はすべて皆堙滅に歸して殆んど尋ぬる由も無つたからで。併しそれにも拘はらず、余は琉球へ來てこの問題の探求に多くの趣味を感ずる事が出來たと同時に、爲朝渡來の事實については寧ろ疑ふべき點が無いと、自分には信じ得るだけの根據を得たのである。

爲朝の事蹟の堙滅に歸した事に就ては、蓋し大なる理由がある。それは琉球對支那の政治的關係で、察度王の貢明（約五百五十年前）以

後政略上の必要と支那思想の輸入とより、すべては日本に關する事蹟を破壞しやうと企てた跡が歷々として居るのみか、尙寧王（約三百年前）以後島津家の附庸となつてからも、支那に對する事大思想は少しも衰へず、以て明治に及んだので、この間日本と關係をもつた事柄はその新舊を問はず、すべて表面から取除く事を工夫して居た。一寸常識では判斷しかぬる馬鹿々々しき例を擧て見やう。

維新前まで薩摩藩から琉球へ租稅取立その他の監守に來て居る鹿兒島在藩官と稱する役人が那覇に居た。それは薩摩の附庸であつて見れば當然の事であるが、讀者は同時に琉球王が貢明以來尙引續き支那の冊封を受て居た事實を記憶せねばならぬ。なぜと云へば爲朝を說くに

當つて見のがす事の出來ぬ一個の滑稽劇がこの間に生ずるのであるから。

實にも名は薩藩の附庸でありながら、各代の藩王はまづ支那から中山王に封ぜられて冠服を賜はり、その都度冊封使が支那から來るので琉球第一の大禮は實にこの支那皇帝の使節を饗應するにある。同時に二個の主權の司配を受るといふこんな不條理の事はない筈であるが、薩藩では止むなく默認して居たので、滑稽劇の依つて生ずるところは即ちこゝにある。いつ冊封使が見えるといふと、件の鹿兒島在藩官と在住の薩摩隼人は、みな擧つて那覇から一里半の片田舍、石原小石原を草鞋で踏んで、人里離れた城間村といふのへ立退く。那覇の港に碇

泊して居る薩摩船はみな隱して了ふ。道光十六年の布達を見ると、

一、冠船(冊封使船)滯在中はやまと年號、日本衆の氏名、やまと書物、その外すべて唐人見咎むべきもの取隱させ可申候。

一、やまと歌、やまと言葉仕ふまじく候若し唐人どもやまと言葉にて何か申聞候はゞ通せざる體仕るべく候。

一、やまとめき候風俗無之やう相嗜むべく候。

とある通り日本の年號の書いてあるもの、日本の書物、日本の器物まで取隱させ、琉球人の日常使用して居るいろは文字さへ使ふ事が出來ず、支那人に日本語で話しかけられたら通せぬ體を粧ほへとまで云ふ實に馬鹿げた話で、この通り備々爲として薩摩の屬國でないことを繕

つたものである。

全く兒戲に等しい眞似をして居たので、事大思想が如何に拔くべからざる根底を得たかはこゝに說明し盡して餘りある。一事は萬事、さればこそ日本に關する事物は、何でも支那人に見せまい、聞かすまい、話すまいと腐心して居たので、從つて支那人の御機嫌を損ねるものは片ッ端から打壞して行つた。余の遭た首里の古老は、馬琴の弓張月すら讀む事を禁ぜられて居つたと、其事實を記臆して語つたほどである。

左なきだに時てふ偉大なる消磨力の加はるべきを、星霜こゝに七百年、かゝる壓迫の下に立つ爲朝舜天の事蹟の、堙滅に歸すべきは寧ろ

當然ではあるまいか。

(下)

今爲朝の渡來を無する說に從がふと、

(一)正史に記錄なき事

(二)保元物語には爲朝が大島自殺の事を傳へて琉球へ渡るの記事なき事

(三)大島にて爲朝自殺の事は歷史上の明らかなる事實なる事

(四)從つて爲朝の琉球渡來說とは矛盾する事

などが重なる根據になつて居る。

翻つて渡來を認める方の側で、維新前までに內地人の筆になつたものに何ういふものがあるかといふと、神社考とか和漢三才圖會とかいふもの、外、新井白石の南島史、それから水戶の大日本史にこの事が錄されて居るに過ぎぬ。これだけの乏しい資料で爲朝の渡來を確める事は、何となく賴なく思はれるが、大日本史がこれを認めて居る事實はわれ等に取つてはたしかに心强い譯である。それにしても大日本史はどれほどの根據の下に此事實を認めたのであらう。

爲朝の事を記したもので內地人の手になつたものはこの通り尠ないが、併し內地人以外の人の手になつたものは割合に多い。そして支那人が琉球の歷史を記したものを見ると、いづれも明らかに爲朝の渡來

を認めて居る。假へば中山傳信錄、元史類篇、琉球國事略等の如き皆然りで、日本の舊記に見えないものが、却て支那の書籍に散見する事は餘程注目を要する點であらう。それから琉球人それ自からの記錄にはどうあるかといふと、琉球の正史たる中山世鑑、中山世譜、球陽の三書には明らかにまた此事が記されてある。

爲朝が果して琉球へ來たとすると、一寸大島で自殺したといふ說と兩立せぬやうに聞ゆるが、琉球史の記錄するところに從がうと、それが少しも矛盾して居らぬのだ。即ち爲朝の渡來したのはわが朝の永萬元年で、大里按司の妹を娶り舜天を生んだのがその翌年の仁安元年そしてその翌々仁安三年には妻子を殘して、中頭の牧那渡を船出し、

再び歸國の途に上つたのである。爲朝が大島で自殺したのは嘉應二年（これは保元物語に從つたのだが一說には承安三年といひ、一說にはまた安元二年とあり、自殺の年月及びその存亡の事實も昔から明確を缺て居る。但し承安々元共に嘉應の後である）であるから、琉球より大島へ歸りついて倘二年間存へて居つた勘定になる。即ち日本の曆史を念頭に置いて編んだものと思はれぬこの琉球史の記錄と、ちやんとつばめが合つて來るのである。

併し支那人や琉球人の書たものにどれほどの根底があるのかと研究して見る事も必要であらう。中山傳信錄、琉球國事略、中山世鑑、中山世譜、球陽等諸篇の中最も古いのは中山世鑑で、從つてその他の

のは世鑑を祖述したものであらうと察せられる。大日本史の出所も恐らくは世鑑であつたらう。實際にまた琉球史中で貴重な地位を占て居るのは世鑑である。左らばこの世鑑は何人の手になつたものか。

世鑑の著者は羽地按司向象賢といふ琉球唯一の經史家で、この人が尙質王の命を奉じ、諸種の材料を渉り苦心して編だものが即この中山世鑑である。世鑑は實に琉球における唯一の史料で、この書の事實は大概信憑する事が出來る。一寸こゝで云つて置たいのは下つて中御門天皇の享保年間、當時の琉球國王尙敬が有名な程順則等二十餘名の碩學に對し、琉球上古の歷史を諮問した事がある。その時の答にまた舜天王は永萬年間に渡來した日本鎭西八郎爲朝の子で、姓は源氏母は

大里按司の妹と記し、この由緒は慥かに相違ないものと信ずるといふ旨を附記してある。これは何に基づいて說を立たかといふと、やはり向象賢の仕置書といふものを基礎としてあるので、その外に無論爲朝の渡來を歸納する材料はあつたものと察せられるが、大體の出所はこれを向象賢に歸せざるを得ぬ。つまり向象賢の著書がどの場合にも一のオーソリチーとなるのであるから、向象賢が如何なる材料によつて爲朝の渡來を書いたかといふ事は一の興味多き研究問題である。而も今日では到底これを尋ねる事は出來ないが、かの貢明以後日本に關する事蹟を有意無意に破壞しつゝあつたに拘はらず、今日でもなほ琉球には爲朝に關するいろ〳〵の傳說がある位だから、向象賢當時には

必らずや有力なる材料が存して居つたに相違ないと信ずる。悲しいかな、これ等の材料は上記の如き事情のために、すべて堙滅に歸したけれども、爲朝が琉球に來たといふ事柄だけは、祖先崇拜てふ觀念に庇護されて、遙かに政略と時間の圈外に立ち、超然として今日まで傳はり來つたのであらう。この點から考へて見ても爲朝の渡來は信ずる事が出來ると思ふ。況んや舜天王に至つては琉球中興の英主として知らるゝ史上の明白なる事實である。乃ち余は爲朝が永萬元年大島を發して琉球に來り、仁安三年琉球を去つたといふ事實を否定すべき根據は何れの方面においても見出し難いといふ事を特記して、筆を進めるのである。併し余は歴史家ではないから、敢て故事の詮索や反古調に紙

面を塞がうとするのではない、たゞ爲朝といふ幻の立つところに蓋ひ寄つて、よし逃水の後を追ふやうな結果を得やうとも、たゞその間に琉球の自然に接觸して、わが趣味の滿足を求むればそれでよいのである。

琉球に於ける爲朝舜天の影響

(一) 舜天王と琉球の文化

爲朝の渡來に關しては、猶多少の疑惑を存するとしても、舜天に至つては既に爭うまでもない歷史上の事實である。彼が琉球文化の上に致したる一大偉績は、炳焉として後世を耀して居る。それは彼が島人の日用文字たる、いろは四十八字を始めて此島に傳へた一事で、琉球人は舜天以降始めて文字あるの民となる事が出來たのである。無論今日の言語もその當時に胚胎して居るものがあらうと思はれる。

內地ではいつの昔かに消滅して居る、源平時代の方言と思はるゝも

のが、今日なほ琉球には殘つて居る。例へば肉をしゝ、妻をとじ、蜻蛉をあさつ、蝶をかべる、妖怪をまじもの、地震をなゐ、醴をしき、去年をこぞ、葬式をたびといふやうな類で、那覇首里邊で肉を鬻ぐ女は「肉買見候へ。」と云つては戶毎を尋ねて廻る。お出下さいといふ言葉を叮嚀に云ふ時は「めん候へ。」門迄出て下さいは「門に出見候へ。」那覇邊ではさもないが、北谷邊へ行くと俥夫までが「俥に乘つてめん候へ。」といふやふな調子で、すつかり鎌倉式である。

尤もかういふ古言が存して居つたとて、それには種々の問題が含まれて居やうから、直ちにそれを爲朝舜天の紀念であるといふ事は出來まい。併し數百年以前の古言が極めて緣の遠い絕海の島々に存して居

るといふ一事は、また慥かに考慮の中に留むべき事であらうと思ふ。

言語の事は兎も角も、いろは文字だけは正しく舜天から傳つたのであるから、これと共に爲朝が琉球に留まつて居た間、島人にいろは文字を敎へつゝあつた事は明らかに看取される。舜天が王位に即く頃までには少なくも舜天の周圍の人民はいろは文字を使つて居たに違ひない。そして彼が王位を襲ふに及んで、始めてこれを全島に使用せしめたのであらう。爾來今日に至るまで七百餘年、琉球人はこのいろは四十八字を日用文字として使用しつゝあつたので、琉球の文化は實に爲朝の遺志を丕にした舜天にその端を發して居るのである。

この點から云つても爲朝父子は、琉球の大恩人と云はねばならぬ。實

際にまた琉球人は爲朝を神のやうに思つて居るので、これを呼ぶにも必らず大和爲朝公の尊稱を以てする位である。併しそれほどに尊崇されて居るならば、どこかに爲朝か舜天の祠位はありさうなものと思はれるのに、それが無いのは畢竟例の對支那思想の餘弊に相違ないと信ずる。尤も那覇と首里の間にある泊村の崇元寺には立派な先王廟があつて、これは舜天の裔と稱せらるゝ尙圓王――今の尙家の祖先――の創建であるが、舜天王の位牌は太祖として中央に大きく祭られ、歷代の中山王は昭穆の序を正し、その左右に居流れてある。有形に舜天王の紀念されてあるところはたゞこの一個所あるに過ぎぬ。かくて今日ではその墳墓すら尋ぬるに由ないのである。

この崇元寺では爲朝の鏃といふものを保存して居て、所望のものには見せて居るが、これは寺には氣の毒ながら眞赤な僞物である。さてそういふ風に爲朝舜天の名は球琉の三歳兒にも知られて居ながら、彼等が尊敬の誠を捧ぐべき目的物は何もないのである。その遺跡や口碑を探らうとしても、それさへ多くは堙滅に歸して居るので、琉球にはさういふ事について手がゝりを求むべき一冊の記錄すら見出す事は出來ぬのだ。併し全然遺跡がないのではない。また口碑が傳つて居ちぬでもない。

（二）琉球に於ける爲朝の遺跡

爲朝の遺跡として傳へられて居るところは琉球ばかりではない。大隅の大島群島にもある。併し大島は廢藩置縣の際までは琉球に屬して居たから、琉球につけていふが至當であるかも知れぬ。馬琴の弓張月に小琉球と記されたのはこの大島である。

沖永良部島に傳はる口碑によると、爲朝が島めぐりの際、暫らくこの島に足を止て居たので、やがて島民の女を入れて一子を擧げ、その子孫は今日なほ繁昌し、手々和村の平山某、赤館の某がその後裔といふ事で、島中の門閥家として知られ、世々の島長はこの兩家から出て居たのである。

併し鬼界ケ島にもこれと同樣の傳說があつて、爲朝がこの島に上陸

した時、島の女はみな驚いて逃隠れたのに、一人機を織つて居た女が怕るゝ風情もなく、却つて爲朝を喜び迎へ、御身は御曹司におはさずやと云かけて妹脊の契をこめ、子孫を擧けたといふ事を云つて居る。そしてこの島には爲朝の矢を射た跡から湧出たといふ清水もある。余は琉球からの歸途この鬼界にも立寄つて、その地の學校の教師から右の話を聞たが、これは弓張月の女護島の件をそつくりであるから、恐らくは稗史を附會した傳説であらう。

また余が琉球の南の果、石垣島の名藏といふところを過つた時、大きな琉球松の二本ある間に、疊三枚程の黑い猫の脊のやうな石のあるのを指さして、土人はそれを爲朝の腰掛石だと説明した。無論爲朝が

八重山まで行つた筈は無いが、それにしても、交通の非常に不便な、南北凡そ二百里の海上に點綴する島々の果から果まで、爲朝の名が行渡つて居るといふ一事、たしかにその後世に及ぼした感化力の偉大なるを思はしむるものがある。

さてまた沖繩本島へ來ると、琉球の正史に記された運天港もある。妻子に別を告た敕那渡もある。大里按司の妹を娶つて舜天を擧けた舊棲の地といふのもある。舜天の旗上した浦添城もある。余は恐くこれ等本島内の遺跡を訪うて、その趣味深き琉球的特殊の風光に接し、思ひ出多き旅行を試みる事を得たので、まさにこれ等遺跡を中心とし琉球の自然を併せ描いた一種の探討紀行を試みやうとするのである。

併しその前に爲朝の後人に及ぼした影響について、二三口碑に存せるものをこゝに錄して置たい。琉球人は城の字をすべてぐすくと訓むので、この城の字のついた人名地名は極めて多い。假へば金城、玉城、與那城、中城の類である。

琉球人一般に信せられて居るところの說に從ふと、始め島民は爲朝の居るところを尊稱して御宿と唱へた。琉球に城を築いたのは爲朝でその當時には城即ち御宿であつた。それより城の事は御宿と云習はして居たので、琉球の發音ではこはくに轉じ、すはしに轉ずる。假へば團子をだアぐ氷をくうり、進むをしゝむといふの類である。然るに貢明以後萬事非日本主義を取つた結果、御宿の字を憚り、城の字を以で

これに代たといふ事で、ぐすく即ち御宿の轉訛に外ならぬ。但し琉球人に發音させると、「ぐすく」ではなく「ぐしく」と響く。さうすれば「ぐすく」の訓は實際の發音と轉訛音とを混同したものでたゞしく「ぐしく」と書ぬ以上、當然「ぐしく」と訓ずべきである。併し馬琴の弓張月始め、邦人の書たものにはみな「ぐすく」と訓してあるから余も混亂を避けてこれに從ふ事としやう。

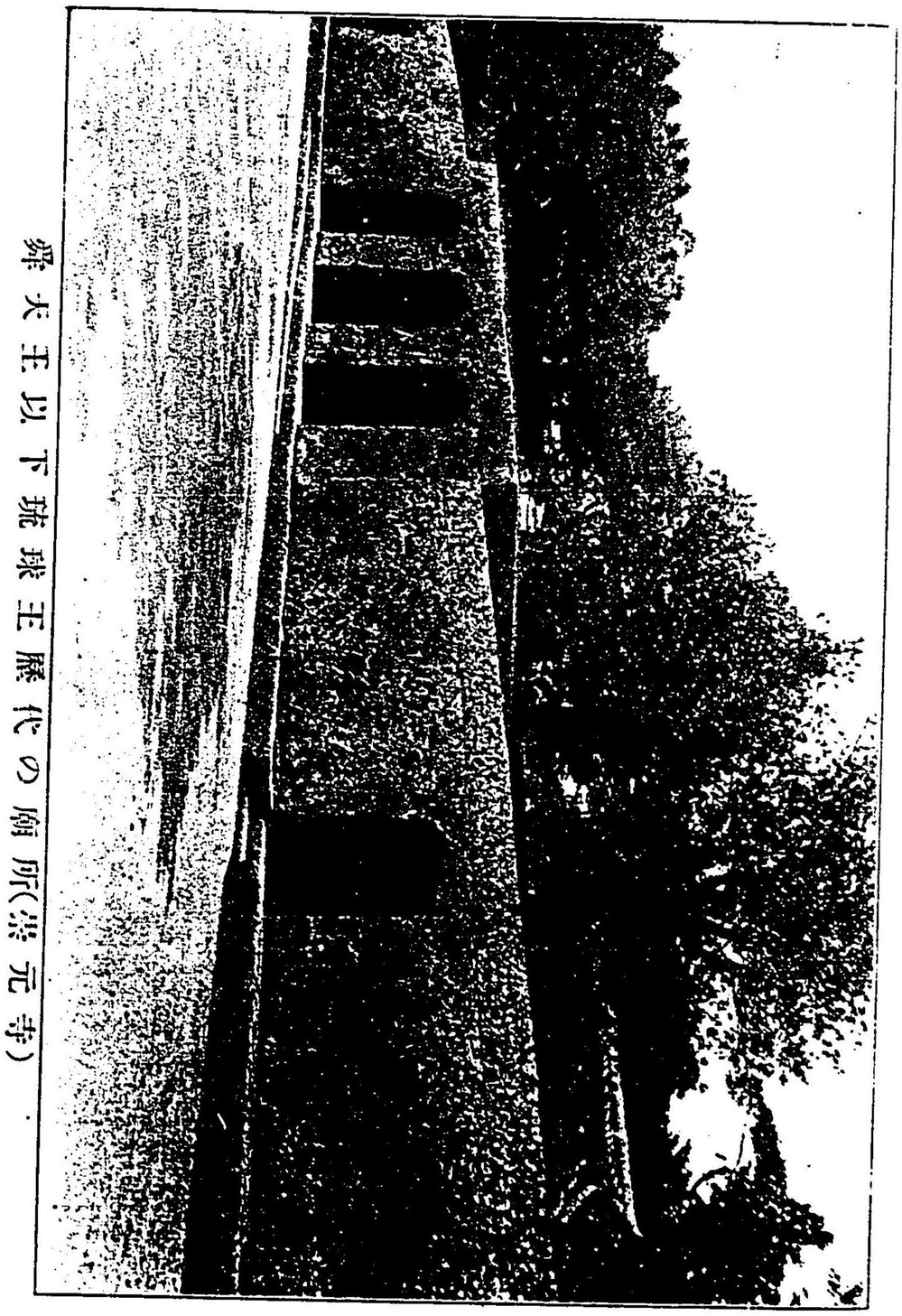
(三) 園比屋武嶽と『妖火見』

陰曆十二月八日首里那覇から田舍へかけて鬼餅といふのを作る。丁度內地の糕のやうに、コバの葉即ち椰子屬の熱帶樹たる檳榔の葉でそ

れを包み、所謂疫癘除にするのであるが、この中身は爲朝に擬してあるのだといふ。

琉球ではかういふ擬人法は普通の思想で舞天にもこれと同樣の事がある。それは古來琉球年中行事中の一大節たる陰曆八月十五日に、必らず作る、小豆ぐるみの餅は中身を舞天に擬したのだといふので、鬼餅を語る前余が琉球の古老より聞得たその由來をこゝに記す必要がある。

舞天の墳墓の所在すら判らぬといふ事は前に述べたが、首里の城外に園比屋武嶽といふ、入口に古い弓張月の挿畫を見るやうな石門が立て、其前には香華の絶た事のない何か由緒ありげな、丁度陵の如き



舞天王以下琉球王歴代の廟所(崇元寺)

幽邃の杜がある。後の方は松やら梯枯やらの生茂つた丘をなして、首里名勝の龍潭の水に臨み、其中腹より右方の低地へかけ、延喜式などに南島より方物赤木を貢すとあるその赤木が、名のごとく赤い木膚を表はし、凄まじい太さの見上る許りの高さに達したのが、内地の樹木に見られぬ一種の熱帶的特性を帶びた枝振を示し、鬱蒼たる密林をなして居るので、如何にも陵か何かを思ひ起させるが、余は或人の琉球旅行記を見るとこの園比屋武を記した條に、或は云ふ舜天埋骨の處云々とあつたので、如何にもさもありさうなところと思はれ、熱心に調べて見たが少しも要領を得ない。昔琉球の守護神「きんまんむん」がこゝに現はれ、中山王の危難を救つたといふ口碑のある事が知れた

位で、尙家について聞いて見ても分らぬ。たゞ尙眞王の四十三年（約四百年前）に石門を作つたといふ事だけは『球陽』に乘つて居る。そしてこれに附記してその創造は曆年既に久しく詳かに稽うるに由なしと斷つてある。尤も遡つて尙巴志の時代に建た石碑が當時こゝにあつたといふ事で、併しそれにはたゞ華木を植たといふ事が刻まれてある許だつたといふ。またこの御嶽の神靈は至聖至靈で祈れば必らず驗ありとして知られ、歷代の中山王も行啓の途次には必らずこゝに參拜するを例としたさうで、これだけの事は知れたが、果して舜天埋骨の處であるや否については、これを取調ぶべき何の手がゝりも無いのである。

さて右樣の次第で、これを舜天王の陵と見る事は、たゞ想像の上にのみ存するに止まるが、余の今語らうとする件の小豆餅の由來は、この園比屋武嶽に多少の關係を持つのである。

天孫氏二十五世の王、その名を逸す。德薄く政衰へ、諸按司命を奉せず、權臣利勇國政を專らにし、遂にこれを弑して自ら王と僭した。舜天時に年二十二歲、從兄賴朝が日本六十餘州の總追捕使に任ぜられたその翌年に當る。變を聞くや、義兵を浦添より起して直ちに首里王城に迫つた。時に夜に入つて戰未だ決せず、舜天は園比屋武嶽に陣して居たのである。

戰の夜に入つたのは利勇の利とするところで、あはれ舜天の軍崩れ

立たんとする時、天の助か數多の流星下つて、城の櫓に下知する利勇の姿をさやかに照し出した。この星明りによつて狙ひ定めた舜天の矢坪は違はず、利勇い顳顬を射て斃したといふので、これが八月の七日諸按司に擁せられて王となつたのが二日隔てた十日で、例年この日には尙家でも内祭を行ふとの事、この七日から十五日までが琉球人の毎年待焦るゝ佳節なのである。

この引續いた祝日の中七日から十一日までを方言ようかみと唱へ、一般の人々が夕刻門口へ出て爆竹めいた事を行なうが、これは利勇の亡魂が現はれると云ふ意で怨敵退散のために行ふもの、ようかみ即ち妖火見である。そして十五日に至つて亡魂も退散し、安心したといふ

ので、盛んなお祝をする。一人息子を身賣（奴隷に）してもせねばならぬと云はれて居る位大切な祝で、この日に例の餅を搗いて、粒小豆でまぶしたものを供へる。星の助によつて逆賊を誅したといふのに因み、そこで粒小豆は星に象どつたもの、中身は即ち舜天だといふ。小豆餅の因緣はまづこんなもの、琉球人の思想を窺くには一寸面白い節があらう。

尤も星明りで利勇の顳顬を射たといふ説は、あまりに空想的で、利勇の自盡説と兩立せぬが、余はたゞ古老の物語をそのまゝに書留たまでゝ如何に琉球人の頭に舜天の名が浸込んで居るかを示す事が出來れば、それだけで遺憾はない。

(四) 鬼餅の神話的由來

さて再び鬼餅に歸るが、この中身を爲朝に擬したといふ事も、今の小豆餅から考へても如何にもさもありさうに思はれる。內地でも爲朝御宿と書て痘瘡除やら惡魔除にするほどであるから、琉球人が鬼神の如く崇めて居る爲朝を、鬼除の呪符とするのは强ち無理ならぬ事であらう。

處が寫本として傳つて居る琉球由來記に載てある鬼餅の由來といふのを見ると、口碑とは全然違つて居る。此由來記は世鑑と同じ著者が集めたのだといふ說もあるが、その眞僞は兎も角、內容は琉球の八百

萬の神たる「御嶽」の緣起を集めた一種の神話めいたものを網羅し、なか〳〵趣味のある記錄であるが、これに記してある鬼餅の由來は次の如き大膽なる叙事から成つて居る。

往昔金城嶽の上に兄妹が住んで居た。後兄は大里間切北面の洞穴を棲家としたが、これが鬼になつて人を喰ふといふ噂の立つたところから、オタアムといふその妹が實否を糺すため、兄の洞へ行つて見た。兄の鬼は留守であつたが、鍋の蓋を取つて見ると人の肉が煮てある。妹は果して兄が鬼になつたと知つて、驚ろきながら逃て歸らうと、金城嶽へ急ぐ途中で、バッタリ兄に行遭つた、兄のいふのに、お前は何用があつて來たのだ。妹は久しく遭はぬ故見舞に來たのだと答へた。

兄は、それでは家へ來るが善い、丁度御馳走も出來て居ると云つて、妹の手を取つた。妹は斷る事が出來なくて鬼の棲家へ連られて行く。

妹は兄の家へは來たもの丶恐くて仕方がない。どうかして逃出す工夫もと考へた末抱て行つた兒を抓つて頻りに啼した。兄の鬼がなぜ啼くかと聞くと、大便に行たがつて居るのだと答へ、外へ兒を連出すや否一散に逃出してわが棲家へ歸つた。兄の鬼は暫らく待つて居ても妹が入つて來ぬので逃たのではないかと、出て見ると果して妹は居ない。後から追かけて北の山の端まで行つて見たが追つかないので、屹度殺して了ふと呟やきながらわが洞へ歸つた。

その後妹は巧みに七ッの餅を作つてその中へ鐵を入れ、別に普通

の餅七ッを作つて待つて居た。或日妹がまた兄に行遭ふと兄は是非大里へ連て行うと云張つたが、妹は自分の家が近いからこちらへ寄つてくれと云つて、とう〳〵兄鬼を金城嶽の上へ連て來た。

さてかねて用意した鐵入の七ッの餅をば兄の前へ出し、鐵の入れてない分は自分が食ながら、態と體をかはせ、前を開いて蹲んで居た。鬼は餅を食やうとしたけれども、鐵が入つて居るので食る事が出來ない。そこで妹に向つて云ふやうは、お前の下の血を吐いた口は何か。すると妹は答へて、下のは鬼を食ふ口で、上のは餅を食ふ口だと答へた。

これを聞くと鬼は大いに驚ろいて逃出したが、あまり喫驚したので

方角を失ひ、谷に落て死んで了つた。この鬼の角が御嶽に納めてあり、それより毎年十二月には家々で鬼餅を作る事になつた。

これが由來記の鬼餅の緣起である。その赤裸々のところに滑稽的可笑味があつて、鬼餅の由來としては頗る妙であるが、併口碑とは全く違ふ。今の處ではいづれに出處があるかは分らぬが、爲朝說の方にも首肯れる道理は十分にある。併し余は敢て鬼餅の出處を研究しやうといふのではない。爲朝に關しては御宿の文字まで之を改めねばならぬ程の壓迫を受て居ながら、琉球人が如何にして爲朝を紀念して居るかを說明するの材料となればそれでよいのである。

爲朝夫妻舊棲の地

《一》解得ぬ謎『和解武』

琉球人は右樣の方法を以て、爲朝や舜天を紀念して今日に及んだのであるが前にもいふ通り、その遺跡に至つては、運天、牧湊、浦添等の外には、格別これといふところも無いのだ。

然るに余が沖繩縣廳より借覽した書籍の中に、笹森某の『南島探險』といふのがあつて、その書中の一節に、

『山南城の下大里村和解武と唱ふる靈地に古木鬱蒼たるあり、土人の口碑に爲朝大里按司の妹と通せる處と』

と記されたのがある。空谷の跫音を聞く思ひして、いろ〳〵の人に尋ねて見たが、不思議と知つてる人がない。縣廳の岸本第二部長（琉球出身）に聞ても分らぬ。縣廳に居る社寺係の琉球人に聞いても分らぬ。尙家の一族の讃得久男爵に尋ねても分らぬ。第一和解武を何と訓むかを告得る人さへ無かつた。

併し余はそれでも『南島探險』の記事に信を置て、格別失望はせなんだ。それは笹森某は琉球諸島を隅から隅まで草鞋で蹈破した人でたしかに自分がその土地を目擊し、土人の話を聞て書いたものに相違ないと信じられたからである。殊にその和解武といふ文字にも、大里按司の妹と通じたところとすれば、何か無意味の文字でもないやう

に思はれて、是非大里村を探つて見やうと考へて居た。

その中余は縣廳の桃原といふ人の案内で那覇より三里を隔つる、糸滿の水産學校――志賀矧川氏が帝國唯一の水産學校として世に紹介した――を見に行つた事がある。この學校は小學尋常高等と併置校になつて居るので、双方を合せると十數人の教師が居て、その二三人を除くと他はみな琉球出身者である。余はこれ等の教師に聞ば無論和解武は解る事と考へた。なぜと云へば和解武のある山南城はこゝから一里に充ぬ處で、その奇拔な輪廓さへさやかに見えて居る程であるから。

ところが意外にもまた誰一人知つてるものゝ無いばかりか、こゝでも何と訓むかを想像し得るものすら無つた。余はこゝに至つて多少の

失望を感ぜざるを得ぬ。がそれでもまだ大里まで行つて見ればといふ肚があるので、桃原某を促して、學校を辭すると草鞋穿の足を南山城の方角に進めた。

南山城は即ち山南城で、また大里城と稱し、地は高嶺間切の大里村に屬する。城のあるところを高嶺山といふ。往昔大里按司承察度が是に據つて山南王と稱し、その孫佗魯毎に至つて中山王尙巴志のために亡ぼされた三世百年間の夢の跡である。爾來星を閲する事約五百年、廢殘の壘壁尙當年の面影を留めて居る。

啻にその和解武が山の下にあるといふばかりでなく、また大抵のところからその弧三角形をなした、一邊を殺ぎ落したやうな山の形が、

水蒸氣の多い琉球の空にくつきりと眉黛を掃いたやうに見えて、何となく人を惹つけるといふ許りではなく、余には紫ばんだ霞にぼかされて居るこの高嶺山の輪廓を彼方に望む毎に、ひどく魅される所因がその外にも存して居た。それは一ッはこの高嶺山が、弓張月の所謂琉球最初の靈跡天孫氏虬を斬つて瘞めたといふ舊虬山であると、一ッは何となく南山城の地がその和解武の有無に拘はらず、爲朝の居城らしく空想に浮んで居たからである。

(二) 弓張月の思出

余の小供の時分に最も愛讀して居つた、朦雲國師出現の一節にはこ

の高嶺山を說て

『却說尙寧王は毛國鼎が諫を聞ず、虬塚を發かんとて利勇以下の近臣を引具し、高嶺を望て出給ふ、そも高嶺は間切の總名にて、一名は舊虬山、その地山南省に屬し、首里の南三里にあり、東北は八頭山に續きて高く、白雲翠微を繞りて向上れば岩嶢たり。正南は蒼海杳渺として高浪却つて連山の如く、直下に溟漲たり。……羊腸たる山路分ゆけば、風拂ふ葉末の露を天に知られぬ雨かと疑ひ、歩みまどべる木下闇は明とも明ぬ夜陰に似たり』

とあつて、やがて虬塚の邊に辿り着き、夥多の人夫を指揮して、塚を發かせると石の唐櫃に掘當る。時に玲瓏として土中に金鈴を振るの

音あり。物共それ引摺あげよと下知の下、十重二十重にぐるゝ卷、えいやッと引揚げて蓋に手をかけると、百千の霹靂一時に落ち、唐櫃は木葉微塵にけし飛んで、一道の黑氣濛々と立昇る中に、隆準骨立の道士偶を喝へて現はれるといふ、即ち朦雲國帥山を出るの條がある。

山城の宇治には今も苔蒸した浮舟の碑がある。手習の跡がある。東屋、かげろふ、椎が本、所謂宇治十帖の遺跡がそれゝに殘つて居る。紫式部の空想の產物に遺跡の殘る筈がないと云へばそれまでだが、實際苔蒸したかげろふの石や浮舟の碑に對すると、一種の幽韻が湧いて、詩人が空想の小琴に微妙の音をたてしめる。

昔を返す幼馴染『禍』といふ獸を使ふ魔法遣の仙人が、一萬八千年

この處に埋つて居た跡だと思ふと、何だか高嶺山の姿まで幼馴染のやうに見えて懐かしい。是非一度は弓張月の遺跡を訪たいと思つて居た。

それからモ一ッ、この高嶺が爲朝の居城らしく、思はれて居たといふこと。

弓張月では爲朝の妻になつたのは、白縫姫の憑移つた寧王女で大里按司の妹ではない。其代り爲朝が大里按司になつて居る。大里按司になつた事は世鑑には見えぬやうだが中山傳信錄にはある。大里按司の妹を妻とし、島民に崇拜されて居たとあるからは、事實上の大里按司であつたらう。又爲朝が琉球に滯在中どこに住で居たといふ特別

の記錄はないが、大體の地勢の上から考へても、大里按司の妹を妻つた事實に鑑みても、大里に棲んで居つたと見る事は、必らずしも架空の想像ではあるまい。殊に大里按司になつたとすれば猶更である。

さてさう假定して見ると大里で居城を構ふべきところは高嶺の外にはない。從て爲朝の『御宿』たるその居城の跡を今の南山城と見る事は大した見當違ではなさゝうだ。爲朝夫妻の舊棲地として口碑に殘る例の和解武が、この邊にあるといふ事も、事實に合つて來る譯である。余はひよつとすると和解武は南山城の中にあるのではないかと思つた。

兎も角この南山城は舜天の歿後七十餘年、大里按司承察度がこゝに

築いて王と稱せしところであるが、余には爲朝以來引續いてこゝに大里按司の居城があつて、それにこの承察度が多少の土工を加へたもののやうに思はれ、この南山城こそ琉球における城即ち「ぐすく」の根本ではないかと考へられるのである。さういふ意味からも余は是非南山城に上つて見たかつたのであつた。

(三) 南山城に上る

何かといふ中余は高嶺山の下へ來た。礁鉢たる珊瑚礁を足下に蹈へて、見上る山南城は不思議に高くも何ともない。

併しこれは地勢が爪先上りに高くなつて居たゝめで、われ等の居るところも既に海面よりは餘程高いのである。こゝから見ると高嶺は宛ら一個の丘陵たるに過ぎぬ。素より羊腸たる山路でも何でもなく、また葉末の露を拂ふべき木立とてもない。裾の方には蝕ばんだ珊瑚礁が處々に露出して多少い蘇鐵が生えてるばかり、すぐ頂に上ると、南山滅亡當時の面影を止めて、自然の頽廢に委ねられた壘壁や礎石が殘つて、小竹叢と蔓草がこれを鎖して居る。なか〳〵朦朧國師の現はれさうな物凄い場處もなければ、かん〳〵と照りつける日を避くべき物蔭一ッ無いので、遠くから望むと紫の霞に閉されて、何か神秘を藏して居るやうに見えた高嶺山も、來て見ると、たゞ明つ放しの、小さな、沒趣味な丘といふだけ。

併し昔の城寨として見る時は、規模は小さいが如何にも形勝の地を占て居る。西は漂渺たる海原の上に繪のやうに浮ぶ慶良間島を望み、北は數十尺の斷崖を劃して與座岳及びこれに續く八重頭岳と相對し、東は國吉の城址手に取るばかり近く、南方もまた遙かに蒼海を見下して居る。大里按司の居城としては最も適當の地點で、爲朝がこゝに城いたと見る事は必らずしも架空の想像ではないやうに考へられる。併しこゝが和解武かと思はれるやうなところは山上にもまた見下す山下にも有りさうに見えぬ。最も城の中の廢墟の間に。二個の小さな祠があつて、その前の石の香爐にはいづれも眞黑に燃さした板線香が殘つて居るのを見ると、もしや爲朝に關係のある祠なのではあるまいかと

胸に波打たせたが、城の上では誰も尋ねる人が無つた。

さて右樣の次第で、南山城には上りながら一向要領を得ず、下てその邊の古老に尋ねる外はあるまいと思案しながら、ふと東の方から山の裾を見ると、そこに小學校があつて、琉球の少年が喇叭太鼓に合はせて行進をやつて居る。この學校へ行けば和解武の事も解決されるに違ひないと、勇み立つて山を下り、高嶺尋常小學校と掲札の掛つて居る門を入つて刺を通ずると教員室へ案内された。校長に遭て早速和解武を持出したが、いかな事、南山城の下に居ながらこれも何にも知らぬのである。余はいつそ腹立しく、いや必らず有るに相違ないと云張たので、他の教員にも尋ねて呉れたが答は矢張り同一である。校長一

人だけなら兎も角他のものまでが皆知らぬのを見ると道がに余も疑ひ始めた。『南島探險』の記事は多分塲處を誤り記したのであらう。糸滿の學校で知らなかつたのは兎も角、同じ南山の廓内にある學校の人さへ知らぬといふ以上は、最早かの記事に信頼を置くべき根據は、全く失はれたものと云つて善い。この上はこのまゝ那覇へ歸る外あるまいと、失望と不快の感に驅れて、つまらない顔をして居ると、校長も氣の毒に思つたか、やがて慰さめ顔に說出るやう——

大里村に玉城加那といふものがあつて、その祖先は大里村の草分として知られて居る。この村の開かれた當時は、南山城よりもずつと南の方にあつたが、水源を追ふてだん〳〵に北へ北へと移り、今では南

山城よりずつと北の高處に部落をなして居る。この部落の一番高いところに居るのがその玉城加那で、村民は村の祖先と崇めて、いつが世にもこの玉城の住んで居る所より上に住む例はなく、この村の移る度毎にその下へ〳〵と部落を形づくるので、彼に對する村民の尊敬は今でもおろそかではない。さてさういふ舊家であつて見れば、或はこの男に遣へば何かの手掛を得られやうも知れぬ。幸に彼の息子が高嶺役塲の書記をして居るから、まづその息子を呼寄せやうと語るのであつた。

(四) 解かれたる『和解武』(上)

余は校長の好意を喜び、然るべく依頼して學校に待つて居た。所在がないから七八ッの一年生の女の兒の遊戯を見る。琉球の先生はこんな幼けな生徒には、内地語琉球語半々位で教へて居るのだが、それでもよく内地語を解して、手足を動かし、遊戯に合せては節面白く歌つて居る。

『かア〳〵鳥、鳥が鳴てゆく。どうこへ鳴て行く。お宮の森へ、お寺の森へ――』。

余はこれを聞てる中に、いぢらしくなつて涙が滾れて來た。

舜天の敎へたいろは四十八文字が、この島の文化の基礎になつて居るかつたら、琉球の小兒がこれほど早く、これほど素直に、内地に同化する事は出來ないであらう。七百年の昔に琉球人と日本人との楔子であつた舜天は、實にこの土地で生れたのだと思ふと、その誕生地だといふ和解武の知れぬのが、なほ更以て遺憾である。

兎角するほどに學校の使丁に伴はれて、二十二三の袴を着た若者と、弓張月の八丁礫を思出させる、五分月代の延て頰髯の生えた片目の、一癖あるげな、五十格好の、厚司めいたひッぱりを着た頑丈親爺とが連立つて來た。

若者は姿勢を正しく余に一揖し、親爺は土下座をして余の前に蹲まつた。校長は余に介して、玉城加那とその息子であると云ふ。父親までも連て來てくれたのは、余に取つては此上なき滿足である。

加那は内地語が話せぬので、校長が通譯の役目に立つ。

「この土地に爲朝の舊蹟があると聞て居るが、お前は知つて居らぬか」。

「知つて居ります」。

さてこそと胸を躍らせて

「そこは何といふところか」。

「わとけなといふところでございます」。

わとけな！　始めて解つた。和解武は即ちわとけなである。

加那の語るところによつて、和解武は矢張り南山の下、この學校と反對の西北の側にあり、爲朝が大里按司の妹と共に住み、舜天王を

産んだところと昔から云傳へのある土地と知れた。『南島探險』の記事は果してわれを欺かぬのだ。

加那がすぐ案内をしやうといふので、校長をも加へ五人打連れて學校を出た。再び南山城へ上つてまた向側へ降るのである。南山は爲朝の城址ではないかといふ問に對して、加那は知らぬと答へた。併し昔は樹木が茂つて晝も暗い程であつたが、廢藩以來だん〳〵切盡してこんなになつたのだといふ。如何にもさうであらう。こゝ一杯に大きな樹が茂つて居たら、今でもきつと虬塚を想ひ出させるに違ない。

かの二ッの祠の中、西なるに對して加那は次の通り語り出でた。

彼の家は世々この西の祠の祭主を勤めて居たので、この祠をコバ王

の御嶽と稱する。口碑に傳はるところに依ると、昔南山の王が始めて支那に貢する時、和解武で獨木舟を作り、コバの木を積のせて持つて行つた。さうすると支那の天子が、何でこんなものを持つて來たと尋ねるので、琉球は憐な土地でコバの木の外には何も献るものがないから持參したのである、併しコバの木は琉球人には大變に必用なもので、この葉がいろ〳〵の役に立つ、夏は風の出る器具となり、雨には無くて叶はぬ簑となり、井戸から水を吸上る鈎瓶ともなる、さういふ必用の木故貢物にしたのであると答へた處が、支那の天子は大層憐れに思召し澤山の金銀を下されたので、それを持つて歸ると、それから始めて琉球に貨幣といふものを作り出した。それ以來コバ王の名を得たの

で、この御嶽はそのコバ王を祀つて居るのだといふ説明。猶加那はこれに加へてこの邊一帶の地、コバの木の大森林をなして居たといふ口碑が殘つて居て、現に和解武の附近でも田や畝を掘起すと、今日では到底見られぬ凄まじいコバの根に掘當る事があると語つた。

四丈五丈の亭々たる檳榔――コバの木が、唯頂にのみ有する羽扇のやうな、艶やかな葉を擴げて、日の目も通さぬ大森林をなして居る光景は、上下幾萬歳、遙かに石炭紀の世界を聯想せしむるものがあらう。それほどにコバのあつたところが、今はたゞ滿目蕭條として、どこにその葉影さへ見えぬとは、桑の畑も海となる。和解武とてよも薔の和解武ではあるまい。

(五) 解かれたる『和解武』(下)

コバ王の話は思ひの外の拾ひものであつた。併し琉球の歴史によると、後龜山天皇の弘和二年(約五百五十年前)始めて山南王と偕した承察度が明に貢し、明主より山南王に贈るに鍍金銀印を以てしたといふ記事がある。コバ王といふのは或はこの承察度ではないかと思はれるが、加那の話はずつと昔の〳〵南山王にせぬと、趣味が索然として來る。惜しい事にこの祠の由緒やら、南山に關する舊記が加那の宅に保存されてあつたが、百年前ほどの火事に皆燒失したといふ事だ。

加那は東の祠については何も知るところは無つた。只南山の御岳と

稱し土民の尊崇を得て居るといふ事で、爲朝の祠であらうといふ樣な事は疑つても居らなんだ。無論之を爲朝の祠と見る由緒の無い事は、之を虬塚と見る由緒の無いと同じである。

南山を西に下つて北する事二三町、青田の中に半島の如く突出た彈丸黑子の地がある。これが和解武だと説明された時の余の驚ろきはどうだつたらう。あまり香ばしい處ではおるまいと豫想はして居ながら、さて來て見ると田面よりやゝ小高い百坪ばかりの地所で何の奇もなく何の風情もなく、名も知れぬ灌木の茂つてる中に、餘り大きからぬウスク(榕樹の一種)と三四本の小さな琉球松が生えてるばかり、『南島探險』に、古木鬱蒼たる靈地とあるには似ても似つかぬところだ。一寸

西手に寄つて自然石を三ッばかり立て、その周圍を珊瑚岩で繞らせた「拜所」があつたが、線香の燃さしのあるのを見ると時々參拜者もあると見える。

加那はこゝが爲朝公の住んで居つた所で、今でもその邊の田や畝を深く掘ると、古器物の破片を發掘する事があると語つた。併しこの土地が果して爲朝の舊棲の地であるかどうかは、到底今日に解決し難い問題である。併し蒙昧の人種の間に存する口碑はこれを重んせねばならぬ。別して大里の士民は爲朝に對する尊崇の念厚く、米、粟、麥等の成熟する毎に、其初穗を摘み「大和爲朝公に」と唱へて、これを供ふるの風習今になほ行はるといふを聞いては、和解武に關する口碑も價

値のあるものと認むるに躊躇せぬ。兎にも角にもかゝる口碑の存する以上、その口碑を紀念する此土地を水遠に保存するの途を立てたい。

加那の語るところによるとこの和解武も三十年前までは全く鬱蒼たる森をなして居たさうで、それが大きいのは自然に枯れたのもあり、風に吹折られたのもあり、また枝を斬拂はれたのもあり、殊に置縣後になつては、その附近の田の持主が作物の害になるところから、だんだん木を斫つて了つたのだといふ。松や柏は擺れて薪となる世に、和解武が田にもならずに殘つて居るのは寧ろ不思議な位。併し世の中の史蹟といふものが、如何なる順序に堙滅して行くかを、この和解武が最も適切に人に示して居ると云つて善い。今に加那の死ぬころには鋤

れて田になつて、誰も爲朝の昔語をするものは無くなるだらう。自分がこれを記錄に留て置かなければ、今より二三十年の後、かの『南島探險』によつて和解武を探らうとするものが出て來ても、恐らく何ものをも獲ずして引返すに違ひない。和解武は土地臺帳に乘つて居る名でもなければ、村のものすら悉く知つて居る名でもないのである。幸に余のこの記錄が永遠に和解武を保存し、はたこれを表彰するの動機となる事を得ばこの上の望は無い。併し殆んど歴史を有せず、また歴史の觀念に乏しい琉球人には無理な注文であるかも知れぬ。

運天港—爲朝の上陸地點

(一) 美なる運天港

永萬元年爲朝船を大島より發し、行々諸島を略して琉球に向ふ途次たま〳〵颶風に遭ひ、船まさに覆らんとするより、舟子等生たる空もなきを叱し、運は天に在り、何ぞ忍るゝに足らんと勵まして、風のまに〳〵漂着した港を運天と名づけた。即ち今の國頭郡今歸仁間切の運天港である。

琉球は低氣壓の本場で、近海には屢々颶風を發生する。爲朝が琉球へ來やうとして颶風に遭つたといふ傳說は事實に近いものと推測され

る。且颶風の媒が無つたとするも、貿易風に吹れゝば、自然に大島から琉球へ來られる。琉球と大島と風俗言語の上に大いなる類似の點を存する事實は貿易風の干係とも見られやう。爲朝を介した交通の結果とも見られよう。要するに爲朝が航海術の極めて不完全な時代に、伊豆の大島から遙かに琉球へ渡つたといふ事は、奇蹟に似てその實不思議でもなんでもない。殊に運天へ漂着したといふ事は、運天港の地勢を見て、如何にもさもありさうに首肯れる。

運天港は中山五港の一として知られ、沖縄における第一の良港で、那覇などは到底こゝと比べものにならぬ。往昔首里を名護に移してこの港を利用しようといふ議論さへ盛んに起つたほどで、港は名護、今

歸仁兩間切より成る半島の東北端に位し、その口は東北に向つて狹く開き、北に古宇利島を控へ、東に屋我地島を擁し、西南北の三面丘陵に包圍されて深く灣入し、全く風波を避け得べき安全港である。併し交通が極めて不便の土地なので、現在ではこの港は何にも利用されて居らぬ。たゞ近海を通る漁船や汽船が暴風に遭ふと逃げ込んで來るといふだけだ。

若し那覇から運天を訪うとするものは、四日目乃至一週間目位に那覇を出る小汽船に乗つて、まづ名護につき、名護から陸路草鞋掛の足を運ばねばならぬ。名護と運天の間は五里足らずであるが、山阪越で隨分難儀な道程である。余が運天を訪づれたのは三月の二十二日で、

名護を二十日に發したのだが、途中北山城を見舞ふため、迂廻して渡久地と今泊に二泊したのである。

運天村に入るには是非ともその三方を、崖になつて包圍して居る丘に上つて、またその崖を下らぬばならぬ。余は運天村に入るに先だつて『爲朝窟』を見るべく、北西の丘の海邊に臨んで、懸崖をなして居る上に出た。こゝからは繪のやうな運天の港と運天の村を、たゞ一目に俯瞰す事が出來る。あゝ何といふ絶景だらう。

余等――國頭役所で仲村といふ人を東道者につけて呉れたので――の蹈んで居る地盤は悉く蝕つた、角立つた珊瑚岩で、これに一面に細な朝鮮芝が生へて居る。蘇鐵が叢生して居る。歩くのにも無論困難

なれば、腰を掛るのさへ痛くて堪らぬ。併し珊瑚岩と蘇鐵に取圍まれたわれ等は既に畫中のものである。腰を下せぬ位は苦にならぬ。足場を計つて突立ながら前面に眸子を濺ぐ。

左には古宇利島が港の口を扼し、二浬ほどを隔てゝ、余等の立る突角より斜めに併行して、その珊瑚礁より成る抉つたやうな島の緣を外洋の波に洗はして居る。われ等の立つて居る懸崖も、彼方の島から見ればその通りに見えてるだらう。島の上は平で蒼青で、半分は霞がかゝつて、見るから心地善い。

運天港はわれ等の立脚地から三日月なりに入込で、油のやうにとろりと湛へた一淺の水を隔て、一杯に抱込んだ屋我地島が右手にひろび

ると、つい其三日月の向ふの端で運天村を包圍する斷崖と接續して見へるのは、灣がそこでまた折曲るからである。その灣は細くて長くて狹くて川とより外見えぬ。その位に對岸の屋我地島は近い。それほど狹い帶のやうな水が流れもせず、漣も立てず、瑠璃色をなして渾然と湛へて居るのを見ると、深さのほども想像される。

突角の鼻が海へ沈んでまた持上つたのだらう、五六の奇拔な形をした珊瑚礁が、によき〳〵と行列して、灣の口を護る巨人のやうに海の中に突立つて居る。こゝから左手の外洋へかけ、無數の暗礁が、見下すと模樣のやうに海を彩どつて、その合間々々の水は春の日に翡翠玉を碎いて流したやうな、何とも云へぬ華かな翠を浮べて居る。これは

海の底が珊瑚礁の碎けた、雪のやうな純白の砂から成立つて居て、美事に光線を分解するためで、かういう海の色は內地の沿岸では見る事が出來ぬ。尤もこれは必らずしも底の眞白なためばかりでない。琉球群島を包んで流れる黑潮は鹽分の極めて强いため、濃い深藍色をなして居るからで、この日本洋流（黑潮）の美はしき深藍色は海洋中の著名なものになつて居る位だ。

三方崖で仕切つて、灣を抱へ込んだ三日月の凹の眞只中、見下す眼の下に、戶數三四十に充ぬわが運天村は、てら〳〵とその小判形の艶のある葉を、暖たかな日光に反射さして、箒のやうに立つて居る福樹に取圍まれ、一寸見ると福樹ばかりのやうに靑々と見へて、善く見て

居るとだん〳〵に灰色の家屋が、福樹の隙間から表はれて來るのだ。塵一つ目に入るものもなければ、騷がしい市井の物音とても聲えぬ。紺青を溶た海には一艘の漁船も見へず、雪を散した濱邊に刳舟の影さへない。人ッ子一人其邊に見へなくて、太古のやうな寂寞と、長閑な春日に領されて居るのを見ると、何か自分は人間以外の天地へ來たやうな氣がして、若しこの海と崖から鎖された村の中へ下て行けば、人も犬も馬も鳥も、そのまゝみな木乃伊になつて居るのではないかと思つた。

(二) 爲朝窟——鐘乳洞

所謂爲朝窟はわれ等の今蹈まへた珊瑚礁の間に、口を開いて居る一個の鐘乳洞を指さすのである。爲朝が雨露を凌いだといふ傳說のあるところであるが、土民はこの窟を尊んで寺と稱し（尤も祭つてある洞窟はすべて寺と稱する）常に香華を供へ、且この附近の土地を寺原と呼ぶさうである。

窟のある邊は蘇鐵の外に、熱帶植物たる章魚樹即ち阿旦が人頭大の實をつけ、所謂章魚の足たる氣根を八方に蹈張つて蔓こつて居る。余等は阿旦の葉を搔分けて進み、漸やく窟の入口に達した。窟は平面の處に開いて、大きな凹をなし、そこを下て行くと崖のやうになつてそこに巨大の口を開いて居る。入口には不完全な土氣色をした鐘乳が亂

下し、上の方からは椰子屬の桄榔や、大葉の蘭科植物や、羊齒や、阿旦の房をなした長い葉などが蔽ひ被さつて居る。穴は三間程の幅で斜めに下り、鐘乳が幾段にもなつて、天井を形作つて居るが、二間ばかり先は最早日の目が通らぬのでたゞ黑闇々と物凄い。

われ等は再び平面へ取つて返し、蘇鐵の枯葉や、木の枝や、麥藁などを蒐めて來て、早速の松明を作り、窟入を試みたのである。善男善女が出入するものと見えて、餘程急な勾配ではあるけれども、ちやんと足場がついて居る。やゝ鍵の手に曲つた道を、濕つて居るので二三度蹈滑らしながら、六間ほど下ると、そこで突當つて、天井が高く凹み、一丈四五尺の上から大きな長い鐘乳が三ッ四ッ固まつてぶら下

つて居る。松明を高く差上ると、疣のやうに露がついて居るのがきらゝと輝やく。

こゝから穴は左へ折れ、入口は一間半ほどに蹙り、殆んどそれを塞ぐかと大岩石が懸垂して居る。その下四尺許りの間隙をなして居るところを潜つて入ると、忽ち廣やかな場所となり、天井は横まに切拂つたやうな美事な傾斜面をなして、次第に高さを增し、下は凡て十二三疊ほどの平面をなしてこれも心もち高く海岸の方に傾斜し、中は辛く立つて歩けるほどになつて居る。天井に手を伸して觸つて見ると水氣を帶びて、小さな鐘乳が出來かゝつて居るが、下は別段に濕つぽくもない。若しこれを隱遁所とでもするには如何にも屈竟のところなので、

爲朝がこゝで雨露を凌いだと想像して見ても、何だか馬鹿々々しくもないやうに思はれた。

行詰りの奥の方には果して澤山の石の香爐を置いて、板線香の燃さし堆かく、杯には芳烈の香に充た泡盛を盛つたまゝのが、いくつも供へてある。窟の中には他に探るべきものはないので、われ等はすぐに穴を出た。

つゞれを鐘乳洞として見る時は、爲朝窟の如き決してその大いなるものでも、美くしいものでもない。普天間洞の如き、金武洞の如き、それよりも大きな美事な鐘乳洞は琉球には四ッ五ッある。別して金武洞の如き最も驚ろくべきもので、若し内地にあつたなら非常に有名な

ものとなつたに違ない。これ等に比して爲朝窟の如き眞にいふに足らぬ。たゞその名に少なからぬチャームがあるといふ許である。

爲朝の窟を出た余等は千鳥に縫ふた阪道を取つて福樹の中の運天村にと下りて行く。見下す眼の前に二三人の小兒が福樹の下から飛んで出たのを見ると、村人は木乃伊にもなつて居らぬと見える。

(三) 累々たる髑髏 (一)

運天村を匝つて居る崖は一寸二百尺もあらう。その險しい中を九折に折曲つた細徑が麓までついて、この別天地と浮世との通路になつて居る。この細徑を半ほど下て一寸外たところに、かねて余の好奇心を

惹いて居た百按司墓といふ由緒の知れぬ古塚がある。この古塚は今に累々たる髑髏を以て充されて居ると、琉球地誌に錄されてあるところで、この驚ろくべき古塚が、琉球の歷史若くは人文に必らず何等かの交渉のある事は、殆んど疑ふを要せずして、而もその跡堙滅に歸し、今日において全く尋ぬべからざる、不祀の墳墓であると聞いては、よし爲朝には何の干係がないにしても、わが運天港の現在を語る上からは、是非ともこれを逸する事は出來ぬ。

これを百按司墓といふ事については、何もその所因はない。山北王の墓がこの崖の下のやゝ北寄にあるところから附會して、山北諸按司の墓だらうと想像するものもあるが、數百の髑髏が累々として居ると

いふ事實と考へ合はせて、この想像說の間違つて居る事は疑ふまでもない。且土民がこれに百按司の稱を被せたのは、尊敬の意を拂つたゝめである事が明らかで、普通の土民の枯骨でないといふ事も推察せられる。而も骨格がいづれも長大で、琉球人でもまた內地人でもあるまいとの說さへある。併し嘗て琉球を跋涉した某人類學者の調査した結果は、長大ではあるが昔時の日本人の骨格に相違ないと斷定したといふことだ。兎にも角にもかういふ髑髏塚が、殆んど交通の途絕え、浮世の風は避て吹く山水秀麗の別天地、嘗ては鎭西八郎の上陸した土地に、何百年雨に風に曝されて居たかと思ふと、何人の胸にも一種の感慨を催ほさしむるものがあらう。

まして自分は今目前にこの髑髏塚を訪うのである。と思ふと、何か胸に描いた朦朧たる幻の中へ惹入られるやうな、身體が締つて、身震の出るやうな、改まつた感覺を胸に湧せて、墓場に導く細徑に一歩を蹈入れた。徑は崖の半腹を横さまに蜈のやうに蜿蜒つて、眉廂の如く被さりかゝつた珊瑚岩と、上下から枝を連ねた木立で作つた暗い洞の中に呑れて居る。手前の方は右も左も例の阿旦で、幾百の大蛇が入亂れて上下に蟠まつて居るのかと、蛇腹の樣な幹と、白つちやけた氣根を縱横に交互して蔓つて居る。

阿旦の間を拔てやゝ斜に上つて行くと、阿旦が無くなつて月橘樹や雜木が茂り始める。それが被さりかゝつた薄暗い崖道を二十歩ばかり

行くと、足場がやゝ開いて、珊瑚岩から成立つた崖は抉り取られたやうに入込み、數個の不完全な奥行のない鐘乳洞が表はれる。

洞は約二丈程の高さをなして、上からは月橘と桄榔と大きな羊齒や灌木が被ひかゝり、崖の下の方からも、こんな陰濕な場處に相應しい幹の黑い常磐柿が黑光のする葉のついた枝を擴げて、葉の細かな、幹のねぢくれた、木肌の白い月橘と交つて、幾十年、幾百年、日の目も通さず、洞を鎖して居るのだ。

この洞即ち髑髏塚である。

(四)　累々たる髑髏(二)

只見る、洞の中、高さ一丈乃至六七尺に漆灰で固めた石壘を繞らしたところが三個處ある。向つて右の石壘が最も大きく、外からは内部は無論見えぬが、上の崖はこの石壘で圍んだ塲處の七分程を蔽うて被さりかゝり、その薄暗い天井の眞中ほどから根本の邊が二尺四五寸廻り、長さは五尺もあらうといふ大きな鐘乳の垂下つて居るのが仰がれる。

石壘は崖についたところが七八尺の高さになつて居るが、崖の方を傳はつて足塲を構へると、石壘の上へ登られる。石壘の上から圍の中を見下した光景はどんなだつたらう。

自分は雨ざらしの骸骨が、算を亂して散ばつて居るのだと思つた。

併しこの豫想とは違つた光景が余の前に展開された。

下から見上げた件の大鐘乳から、若し雫が垂たら丁度落るだらうと思ふところへ棟木が來て、厚三寸幅一尺長さ一丈四五尺の厚板四五枚宛左右に葺下げ、太い圓柱で支へた六尺高さの頑丈な屋作がまづ目に入る。木の性も判らないほどに洒て居るのを見ると、百年二百年の新らしいものではない。それでも餘り朽ても居ないのは餘程堅緻な材を擇んだのだらう。後で聞ばザホンといふ琉球で一番持の善い稀な木材と知れた。

この屋蓋に蔽はれた中に、また意外にも數個の唐櫃めいたものがあつて、破風構の屋根作りになつたその蓋の、まるで取れてるの、傍に

飛んで居るの、傾いて居るのなど亂雜に取散けて居る、その唐櫃の中が一杯の髑髏で詰つてるのだ。

唐櫃の中ばかりではない。唐櫃の外にも骨がそこ〳〵散ばつて居るらしい。余は兎に角唐櫃の傍へ下て行うと考へ、足元へ目を注いでまた驚ろいた。こゝにも洞の方へ入込んで、これは唐櫃よりも大きな蓋の無なつた箱があつて、それにも一杯の髑髏の中から、大腿骨や肢骨がにゆつと出て居る。あまりに足の下にあつたので思はずぞッとした。

丁度余の立つて居る邊から珊瑚岩が內側に石段のやうに積重ねられて下て行けるやうになつて居る。無氣味ながらも余はそこから下始めた。洞の壁はじめ〳〵としてところ〳〵蒼青になつて居る。處へ以て來て珊瑚岩そのものが既に髑髏然として居るので――隋書に首里王城の壁壘髑髏を重疊すと錄されたのも珊瑚岩を見違へたのである――余は何だか髑髏を蹈で下るやうな心持だ。いや氣のせい許りではない。だん〳〵下の方へ行くと岩と岩との間から骨が出て居る。その位はまだしも丁度自分が跨げねばならぬところへ、誰か今ころ〳〵と放出したやうに、下顎骨の取れた一個の髑髏が、逆さに岩の上へ乘つて居て、一双の深い眼窠から侵入者を見上て居る。それを跨ぐのが何だか氣味が惡い。なるだけ避るやうにして下やうとすると、その時一段下からふうわりと立つたものがある。

それは琉球到處の樹間谷陰、日の目の及ばぬところを擇んでは飛んで居る烏羽揚羽で、翅は漆のやうに黑く、底光りのする青藍色の粉鱗が翅一面に散布されて、肛角の邊に赤色の新月紋のある、如何にも美事なのが、女王のやうな態揚な態度でふわと立つたので、その立つた跡を見ると、翅上の粉鱗を滾して行つたのかと、眞丸い顱頂骨に綠青の粉の吹いた髑髏がまた一個、岩と岩との間にある。

余は一昨年の春か、京都の繪畫展覽會で某知名畫家の描いた髑髏に蝶の止つた大幅ものを見た事がある。筆者は深刻な理想を寄せたつもりであつたらうけれど、何だか態とらしくつて、却つて淺薄に陷り、夢と云へば蝶を書く月並調を免れぬと思つた。處が今目前髑髏の上から胡蝶の立つたのを見ると、繪を見た時とはまるで違つた感じが浮んだ。繪にしても詩にしても月並になるか知らぬが、目前見た感じは決して月並ではない。この時この際一幅眼前の光景は、わが胸臆の琴線に戛として聲あらしめたので、余は何とも云へぬ刹那の甚深の感に捕へられ、覺えず息を殺して片唾を呑んだ。わがつく息さへも蝶の翅に感じはせぬかと恐れたのである。

蝶はふわりと石疊を越て見えなくなる。

余は茫然として夢を追ふやうにその後を目守つた、たゞこの時の余の感は渾沌として形をなさぬ深い詩的感興が浮んだといふまでゝ、自分に解剖する事も出來ぬが、此刹那の感情を含ませる事さへ出來れば、

詩にもなれば繪にもなると思つた。この詩この繪無論月並のそれではないと信ずる。

(五) 累々たる髑髏(三)

唐櫃めいたものを收めた屋蓋は葺下の處が四尺ばかりなので、屈まなければその中に入れぬ。その邊には山原竹(國頭一帶の地を山原と稱す)で結んだ竹垣の朽たの、この屋蓋の腰に繞らして居つたらしい板の取れて腐つて居るのなど、足の踏込どころも無いほどに散亂し、そのまた竹頭木屑の間に、頭蓋骨の破片や肋骨などが見えて居る。

葺下を潜つて入ると、立てるほどの高さになつて、この中に唐櫃が

四個あつた。この唐櫃は高さ二尺幅二尺長さ三尺程の者で、これに黑塗の古風な脚がついて居る。内地の唐櫃と略同じであるが、たゞ蓋がなく、その代りに破風作りのお宮の屋根のやうな形で、やはり朱塗地に黑塗の棧が細かに打つてあるのが乘て居る。頗る手際な製作品で、朱塗も黑塗もひどく剝落して居るが、よほど質の善い、無論琉球漆を用ゐたのであらう。尤もこの屋根が完全に乘つて居るのはその中の一個のみで、一個は半朽ちて唐櫃に倒れかゝつて居り、一個は下に落ちて大方破壞し殘る一個は影も形も無つた。

猶余は比較的完全な唐櫃の片隅に美事な平假名で「ゑさしのあ—」と黑漆で認めてあるのを認めた。併しその後につゞいた數文字が

全く剝て居るので、何とも判斷の途はつかぬのだ。この外にはどこにも文字は無つた。いづれも唐櫃の中には一杯骸骨が詰込であるが、中の方はもう腐朽して居るらしい。これ等の骨格を見るとなるほど逞ましいもので、頭蓋骨も概して大きく、大腿骨脛骨なども現今の人より長大である。

無氣味なのでそこ〳〵に屋蓋の外へ出たが、洞の奥の方を見ると一寸小高いところに漆灰で塗籠たところがあつて、その前に香爐や觴が供へてある。その塗籠めた中にも骨があるのだらう。石疊への取付にある大きな箱がまた眼に付く。これも一杯の髑髏であるが、併し一尺ばかり下の方を突いて見ると骨が朽て粉々になつて居る。暫らくすれ

ば上の方の髑髏も朽て土に歸するだらう。

こゝを出てから今度は第二の石疊へ登つてその中を窺いて見た。こゝにも前の通りの屋蓋があつて、石疊はそれを匝つて居るのだが、併し隙間もなく周圍を鎖して居るので下て見る事は出來ぬ。この中にも三ッ四ッの唐櫃はあるらしい。これは屋蓋の腐れ落ぬ限りは、若くは石疊を取壞たぬ限りは、何人も窺けぬやうになつて居る。大方中の骨のなくなつた時に屋蓋も腐つて落るだらう。

第三の石疊は最も高く一丈からある。これは足場がないので一寸登り惡かつたが、それでも工夫して上つて見た。併しこの中には屋根も唐櫃も骨もない。同行の東道者も頗る不審であつたが、だん〳〵見て

居ると、骨の破片らしいものがそこ〻に散ばつて居るのが目につく。たゞそれきりだ。併し後で聞くとこの石疊の中には始めから屋作も唐櫃も無つたが、骨は一番餘計にあつたさうで、ところが明治十五年に始めてこれ等の石疊を設けてからは、空氣の疏通を妨げたのと、中には濕氣が多いのとで、今迄いつが世にもその形を變なかつた骸骨が不思議と融るように朽ち始め、今では殆んど影もないやうになつたのだといふ。人間の骨が斯う脆く分解するものとは始めて知つた。それでは第二の石疊の中も屋根の落ぬ中に骨は無なつて居やうも知れぬ。

(六) 累々たる髑髏 (四)

三個の石疊と並んでやゝ離れたところに、また一個の岩窟がある。丁度土牢めいてその口に太い丸柱を穿込み、厚い板を打付てあるのが、大方は朽ちて内部があらはになつて居る。これは前の髑髏塚とは趣を異にし、略墳墓の形をなして前の方には素燒の壺、奥の方にはこれも素燒の祠形の土器が双方で四五十並べてあり、行止りの小高い壇には白骨が積れてある。壺の蓋の取れたの、祠の壞れたのなどから骸骨がはみ出して居る。手前の壺ほど新らしいのは、違つた時代にだん〳〵入てゞたものであらう。余は朽た板の間から手を差入れてすぐ前の最も新らしく見える壺の蓋を取つて見たが、中には無論バラの〳〵骨があつて、その蓋の内側に嘉慶十八年運天村某女と骨の主の名が記され

ておつた。嘉慶は清朝の年號で（琉球人は維新前まで支那の正朔を奉じて居た）今から約百年前に當る。つまりこの岩窟は百年前までの運天村土民の墳墓で、百按司墓とは關係の無い事が知れた。

北山王の墓がこの下の方にあるといふので、崖を下てそれを見に行く。これは墓域を設けて壘を繞らし、墳墓は矢張岩窟を利用して石で壘みこめてある。北山王は三世で亡びたのだが、その中の誰であるかは分らぬ。以前には碑石が立つてあつたといふが、今は碑の立つて居た後が殘つて居るのみだ。もしこれを初代の怕尼之の墓とすると五百七八十年前の墳墓で、今日琉球に知られて居る墳墓の中最も古いものの一である。その點においてこれも貴重な墳墓であらう。

この墳墓の隣りにまた岩窟があつて、これは百按司墓の隣りの岩窟同樣、土牢式になつて居る。中には矢張骨を收めた土器が六十許並んであり、奥の方には累々と白骨が積れてある。これも土民の骨を收めたものらしいが、後で聞て見ると双方の岩窟とも前から夥しく骨のあつたところへ、土民の骨壺を收めたのだと云ふ傳説になつて居るさうである。さるにてもどうしてこんな夥しい骸骨がこの土地にあるのであらう。

この外同じ崖續に昔から「大和墓」と呼れて居るのがあると聞いて、海岸へ出て見た。この「大和墓」のあるところは運天港を包圍する崖の鼻で、丁度「爲朝窟」のある下の方に當つて居る。唯見ると木も草

も生えて居ぬ、削つたといふよりは挾つたやうな崖の中腹、二丈程の高さの處に、その珊瑚岩を刳取つたやうな凹處があつて、その中に棺のやうなものが嵌込んである。善く見るとかの百按司墓の唐櫃を收めた屋蓋と同一の構造で、これは圓柱の間を張詰めた板もそのまゝとなつて居り、たゞその中央が窓のやうに明て居る。尤もこれは百按司墓の屋蓋ほどに大きなものではない。高さ四尺に長さ一丈位。

下には何の足場もない挾つたやうな中腹にあるので、こゝへはどうしても登る事は出來ぬ。こゝへ嵌込むまでには定めて大袈裟な足場を要したのだらう。大和墓といふからは無論琉球人の墓でない事は明らかである。又これほどの手數を懸てあるからは、常人の墳墓でない事

も明らかだ。こゝで余の胸に閃めいたのは、この「大和墓」とかの百按司墓と何かの關係があらうと思はれた點である。而もこの大和墓の木組はよほど新しく見えるので、これがまた余をして少なからぬ怪訝の念を生せしめた。

(七) 累々たる髑髏 (五)

余は琉球に於て、百按司墓や大和墓のやうな屋作りの墳墓を未目擊した事が無い。またかういふ屋作りの建築物を見た事も無い。而も大和墓の時代を新らしいものとするとそこに當然疑問が起つて來る。どうして違つた時代に作つたものが一致してるのだらう。單に百按司墓

の屋作りを模したものと云へばそれまでだが、そんな無意味な事ではなく、何か兩者の間に關聯するものがありさうに思はれる。

余は大和墓の名が明らかに日本人の墓である事を示して居る如く、百按司墓の遺骨も日本人のそれではあるまいかとの考が頭に閃めいた。

併し後で今歸仁間切長を勤めて居る老人から、この大和墓も百按司墓と同時代のものであるが、海岸の吹さらしにあるため腐朽の度が少ないのだと告られた。若し同時代のものとすれば同じ構造である事に不思議はないのみか、いよ〳〵兩者の聯絡が無ければならぬ譯になつて來る。尤も老人は大和墓の内部は知らぬが、廢藩の際長梯子をかけ

て中を調べた事があつて、その際には骨と神酒壺艙等があつたと聞いて居ると語つた。大和墓の中には唐櫃は無いらしい。骨は澤山の骨であつたか否やについては老人は何も知る所は無つたのである。

老人が同時代のものと語つたについては、昔からさう云傳へられてあるといふだけで他に根據はないが、この傳説に間違のないものとすると、一方に大和墓の稱が殘り、一方に百按司墓の稱が殘つたのは何故だらう。百按司墓の方は矢張日本人ではないのだらうか。今日ではこの問題を研究する唯一の手がゝりはかの屋蓋と唐櫃の外には無い。

さてさうなるとこの唐櫃の一個に殘存する平假名文字(ゐさしのゐ)の五字は貴重な手がゝりではあるが、これは琉球古言の研究者でなけれ

ば手も足もつける事は出來まい。琉球の古言は今より百五十年前のものすら今日の琉球人に分らぬ位で、無論內地人には想像さへ付けかぬる。古言研究者にしてもこの五文字だけでは大方持餘すだらう。たゞこのいろは文字によつてその筆者の琉球人である事が想像される。さうするとこの墳墓を設けたものも琉球人らしく思はれて來る。要するに「ゑさしのあ—」と書出した文字の意味が判明せぬ限り、白骨も建設者も共に不明の問題であると云ねばならぬ。

これを爲朝上陸の紀念と見る事は餘に空想的である。併し土民は少くも三四百年以前のものであらうと云つて居る。兎にも角にもこの墳墓は何か琉球に起つた異常の事柄の紀念である事は明らかで、從つて

これ等の白骨が血と肉とに包まれた昔、果敢なく運天の鬼となつた事實には、必らず傳ふべきものがあるに相違ない。

(八) 累々たる髑髏 (六)

そこでこの運天港と內地との歷史的交涉を調べて見ると、所謂慶長の役なるものがある。それは秀吉征韓の際琉球が言を左右に托し、その賦徭を果さゞりしに遠因し、近く家康が琉球の朝聘を促がしたに對し、明の後援を賴んで應じなかつた亡狀を糺すため、慶長十四年三月島津家久が問罪の師を進めたのである。その時の總大將は樺山久高で、途中大島諸島を降し那覇港に向つたが、港口に鐵鎖を張渡してあるた

め上陸する事能はず、戰、頗る不利で薩軍の困憊甚しく、久高は將に自刄せんとするの窮境に陷つた。此時北方に運天港といふ爲朝の漂着したところがあるが、そこから上陸してはと諫むるものがあつたので、自刄を思ひ止まり、船首を旋らして運天に向つたが、兵氣頗る沮喪して居るので久高は一策を設け、假睡の後衆に向つて、己は今夢を見た、枕元に美くしい天女が表はれていふには、自分は琉球の守護神であるが、親から來つて捷を大和の軍に授くるのだと、かういふかと思ふと夢が覺たが、その姿はこの通りだと天女の肖像を書いて示した。さうすると薩兵はそれこそ爲朝の夫人舜天の母に相違ないと云つて大いに喜び、全軍頓に振ひ運天に上陸して見ると、琉球では此地の險を

頼み、左したる守備を置いて無かつたから、容易く攻入る事が出來て、遂に征討の目的を達し、尙寧王をして面縛降を乞ふの止むなきに至らしめた。

運天港には斯ういふ歴史があるとすれば、百、按司墓の累々たる白骨を、當時の薩軍の戰死者であらうと見る事も多少根據のある想像である。併し事實の上においては運天上陸に際し、薩軍に死傷者のあつた事は琉球の歴史にも薩摩の藩史にも記されてない。當時琉兵は殆んど國頭地方に備へてなかつたので、薩軍は無人の地を行く如く運天上陸後一週間で早くも那覇に達して居る。從つて此間には戰爭らしい戰爭のなかつた事が想像される。かう考へて見ると薩摩隼人の遺骨であら

うと見る事も聞えなくなる。假に上陸の際多數の戰死者を生じたものとすれば、この役以來琉球は名實共に薩摩の附庸となつたのであるから、遺骨の收容は薩摩の手で、若くは薩摩の命令の下に行はれたものと見るが當然である。若し薩摩の手に行はれたものなら、日本風に埋葬し石碑位は立て置さうなものだ。それを全然日本に例のない唐櫃に盛てそのまゝ置いてあるのも不審なら、かの平假名文字も不審の一ッである。また慶長役に最も多く薩軍の戰死者を出したのは首里に近づいてからの戰爭であるから、戰後に遺骸の收容をするなら、却つて首里附近にその墳墓がなければならぬ筈、それにたゞ運天にのみあるといふのも不審だ。要するに慶長打入の紀念と見る事も詮索すると怪しいものになつて了ふ。

併し余は那覇に歸つてから後、屋蓋の壁に弘治十三年九月の文字が幽かに殘つて居ると記された或記錄を見、なほ尙德王の凶變（横死）に世を免れた名門右族の墓であらうと附記してあるのを見た。果して弘治十三年の文字が殘つて居たかどうかは知らぬが、今これを事實として見ると、弘治十三年は丁度今より四百年前に當るから、いよ〳〵慶長役とは關係のないものになる。そこで尙德王の凶變はいつ起つたかといふと、わが文明元年で弘治十三年よりは三十二年前に當る。殉死を遂たものであるならば年號が一致せぬ。また殉死でも無ければ多數の骸骨が一緒に集まる理屈がない。且殉死としてもこれだけ夥た〻

しくある白骨の説明としては人を首肯せしむるに足らぬ。何にしてもまづ解決の道のない墳墓である。

併し解決の道は無いにしても、何か琉球の歴史と交渉のあるらしい墳墓を徒らに石疊の中に腐朽せしむるのは惜しい。明治十五年に石垣を設けた趣意は、無論この墳墓の原形を維持し白骨の散亂を防ぐにあつた事は明らかであるが、それが事實においてはその破壞者となり、今まで幾百年そのまゝであつた骨を時の間に分解せしめ、貴重なる屋蓋唐櫃の腐蝕をも急速ならしめ、あはれ遠からぬ未來に、すべての手がゝりをその遺骨と共に一片の土に歸せしめんとしつゝある事は、非常なる遺憾と云はねばならぬ。もし琉球に博物館の如きものがあつて

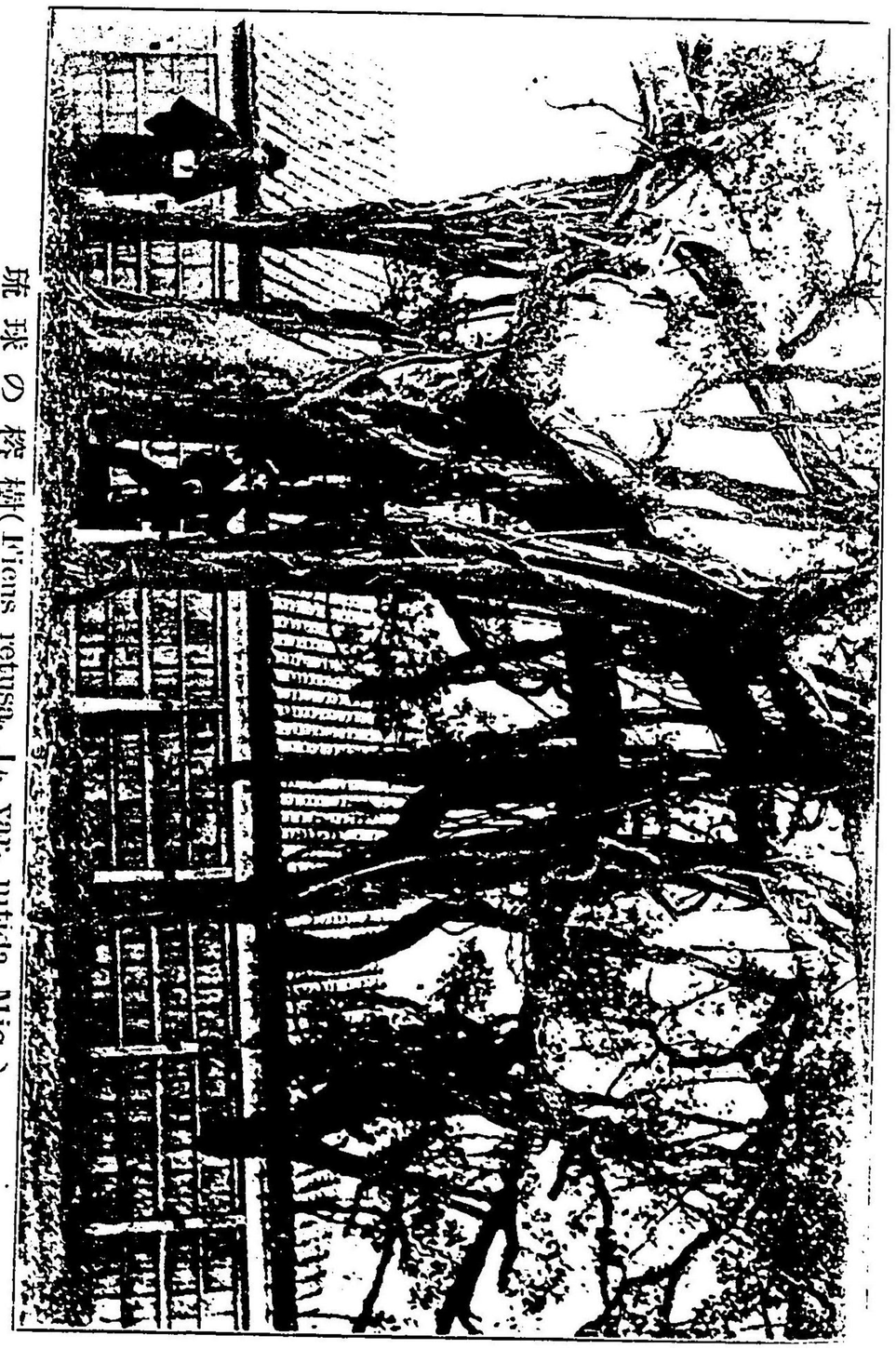
（琉球に博物館を設くる事は學術上最も希望に堪えぬ）その館内にこの唐櫃を遺骨と共に保存する事が出來たなら、如何に幸であらう。さうすれば識者の目にも觸れ易く、或は容易に解決の途を見出す事が出來やうも知れぬ。何にしてもかういふ解釋の出來ぬ不思議な髑髏塚が爲朝の上陸地點、而かも眼馴て居る琉球人すらその風景を稱ふる山水秀麗のわが運天村にあるのは、奇なる因緣と云ふべきで、どうかしてこれを闡明するの途を得たい。讀者も余がこれを特筆したに對し、無用の文字を臚列したものでない事を諒さるゝであらう。

（九） 運天の榕樹

古巴梯斯樹――荒磯貝

われ等の今宵の宿と定めた今歸仁間切役場は獨樓塚を後に背負つた海岸にある。余は隨分琉球を歩いて廻つたが、今宵の宿所ほど氣に入つたところは無いと思つた。前に帶のやうな入江を抱込み、三方崖で仕切られて居るので、實際浮世の緣の放れた土地へ來たやうな心持である。そのまた靜かな事と云つたら、無人島へ漂着した場合を想ひ出させる位だ。

間切役場は灣の奥、船つきの極めて安全なところに建られてある。爲朝の上陸したのもこの邊からであらう。役場の建物は昔の番所をそのまゝ用ゐて居るのも嬉しい。役場の前には一列に大きな福樹が數本他に又五本の榕樹が枝を聯ねて居るが、その中三本の榕樹は凄まじい



琉球の榕樹(Ficus retusa, L. var. nitida, Miq.)

連天海峡潮水中の紅樹林(Bruguiera gymnhiza, Lam.)

大きさのものだ。琉球にはそこゝ、隨分巨大な榕樹があるが、こんな立派なものは餘り類が無い。一寸この榕樹だけでも見て置く値打があらう。

三本とも一丈三四尺廻りもあつて、その象のやうな幹がいづれも人の丈ほどのところから、海の方へだけ向けて指を擴げたやうに分れ、その分れた幹がまた幾個かの太い幹になつて、枝から枝を網の目のやうに交へ、地上から一丈二三尺の空間を匐て居るので、餘り氣根は垂れて居らぬが、その密集した葉は四時日の目を遮ぎり、その下優に三百人を坐せしむるに足りる。內地では千年から經ねばこの位の大さには育たぬ。余は爲朝もこの木の下で憩うたのではあるまいかと想つて

見た。併し熱帶植物の育ち方は內地の筆法では押せぬから、七百年の齡を重ねたらうと推定する事は出來ぬ。併し少くも慶長の島津勢はこの下で勢揃ひをしたらう。百按司墓の白骨が血と肉に包まれた昔を、此榕樹は見て居るだろう。余はこの樹に聞て見たい事が澤山ある。さう思つて見ると榕樹の下が何となく離れにくい。

この榕樹の外に內地に見馴ぬ枝振の、四五本の熱帶樹古巴梯斯が適宜の間隔を置いて港を守る番兵のやうに立つて居る。これも年經る大木であるが、この樹の特性として一丈あまりの處から本幹と殆んど直角に、四方に大幹を射出し、宛から狩野派の繪に見るやうな桔掘たる、先をぶツ切つたやうな多肉性の枝を電光形に交互して居る。今は落葉

期で葉は殆んど無いが、無益な小枝がないので自然に雅致ある木振を作し、この樹があるのでまた繪のやうな運天港を更に繪畫的ならしめて居る。

この樹のすぐ下の波打際には暖かい春日に人ッ子一人もなく、たゞ細かな奇麗な貝が蒔だやうに打上られて居る。この貝は爲朝の上陸した頃から、いや琉球の開闢から誰拾ふものもなく、日に〳〵岸に打上られては、日に〳〵砂に埋められて、今日に及んだのだらう。貝拾ひといふものは趣味のあるものだ。余は小供の土產に拾ひ始めたが、何か琉球の生命の一片に觸るやうな氣がする。

右手に海軍の倉庫があつて、そのまた右手は運天の南の鼻で、この

邊の懸崖は髑髏塚のある邊と違つて珊瑚岩ではない。青黑い中に白い斑の入つた一種の大理石質より成る。都會へ運んで來れば大した値打の出さうな所謂奇石怪岩が波打際にごろ〳〵して居る。運天に來た紀念としてその小塊一個、これはわが書齋を飾るため、一個は諸國の奇石を蒐めて居る浩々歌客子への土產として拾ひ取る。

(十) 蝙蝠の聲

間切役場で一風呂浴て、フランネル一枚になつた心持は何とも云へぬ。准熱帶の琉球では極寒の日に桃、や櫻の花が咲く。比較的暖な關西地方で冬季中の最低温度が華氏の廿八九度から卅四五度迄、最高が四

十度から五十五六度の邊を往來して居る。それが琉球では最低四十七八度を下ると海の魚が鯛やら蟹やら死んで浮き上る。先斯いふ事は一年に一度あるか無い位、この原因は判らぬが、多分魚の急激な温度の變化に對する調節力の乏しい爲であらう。何しろその位の氣候なのに、ましてこれは三月の半過、草鞋穿で一日歩いては襯衣も股引も汗みづくになつて了ふ。何は置ても風呂の御馳走に越たものはあるまい。

但し運天村で風呂のあるのは間切役場だけだ。尤も琉球ではどこへ行つても、まづ間切役場か學校以外に風呂は備へて居らぬ。風呂屋といふやうな贅澤なものは無論ない。役場でも風呂の出來るのは時たま珍客の入來の時か何かで、今日は即ち珍客入來のためである。余の

國頭旅行に就ては縣廳から預じめ間切役場へ照會して置いて貰つたのと、國頭郡役所からも案内の役人仲村君をつけて呉たゝめ、萬事に好都合であつたので。さて風呂も終り食事も濟むと、役場から通じてあつたとて、謝名高等小學校を始め附近二三里以内の小學校の教師二十餘名が尋ねて來た。余は一場の座談を試み彼等からも種々の嗜味ある談話を聞いた。余は何か爲朝の事に關し、この地方に存して居る口碑若くは遺跡の有無を尋ねたが、どうもさういふものは何も存じて居らぬやうである。かの髑髏塚についても說を吐くものすら無つた。たゞ運天村の屬して居る間切の名稱の今歸仁は舊「今鬼神」で、即ち爲朝上陸の際土民が今日の鬼神であると唱へたところから、それを紀念す

るため此地方に「今鬼神」の名を負せたのを、貢明以後支那を憚つてか、若くはその稱呼を美ならしむる支那流の筆法でか、今歸仁に改めたのであらうといふ說のある事を彼等の一人から聞た。成程それは說として面白い。さうと極めて仕舞へば頗る妙である。とその時は考へたが、後で那覇へ歸つていろ〳〵の舊記を調べてる中、ふと慶長十九年に薩摩から、三司官に與へた覺書の中に「今鬼神わん兩港へ云々」と記したものがあつて、なほ他の記錄にも今鬼神と明らかに記してあるのを見出した。さうして見ると、少なくも慶長のころまでは今鬼神と書た事は明らかで、今歸仁は今鬼神の字音の轉訛であらうといふ說は決して空想ではないのだ。余は那覇でこれを發見した時ほど愉快を

覺えた事は無かつた。

多數の訪問者が崖を越て歸つて了ふと跡は俄かに淋しくなる。八疊程の一室の中、携帶の蚊帳毛布を取出し、寢處を設けて一人その中へ潜り込んだが、間切長と仲村君は事務室を隔てた彼方の室に寢處を設けたらしい。夜は寂として墓場のやうな靜さである。容易に寢つかれないで居ると、庭の方に當つて忽ちきゆッ！きゆッ！と抉るやうな聲が聞えた。余はこの聲に馴染が無つたら、塲處が塲處なり、何とも云へぬ氣味惡さを感じたに相違ない。これは一寸小猫ほどもあらうといふ大蝙蝠の啼聲だ。多分福樹の實を食に來たのだらう。兩の翅で人の目を隱して血を吸ふ蝙蝠があると聞いたが、琉球の大蝙蝠も夕方森の

中でゞも出くわさうものなら、まづ身搏へでもせずには居られない。

蝙蝠の聲は聞えなくなつたが後の寂寞は一しほである。まさか蚊帳の上へ來て眼を光らしても居まいなど、思つて居る時、今度は裏の崖の方で梟が鳴き始めた。百按司墓の邊である。間を置て鳴くのが、てれでもか〳〵と突立た刄を抉るやうだ。こちらは一聲でこたへて居る。梟は冥土の消息を傳へる鳥といふが、髑髏塚を守るには如何にも相應しい。だん〳〵に執念く鳴く其聲に惹つけられて、魂が戸の隙間から誘ひ出されるやうな心持になつた。途端にまたきゆッ！と厭な聲、身體が思はず引締る。屋外一歩は魔界に落たやうな氣持だ。

港外の珊瑚礁を洗ふのであらう。ざあ〳〵といふ波の音が遠く聞え

始めたが、何か木嵐でも吹いて來たやうな氣勢、目はます〳〵冴て眠られぬにつけ、空想は自然と髑髏塚の上に逍遙ふ。余は爲朝が白峰で崇德天皇の亡靈を見た件を心に想ひ浮べた。時の間に波の音は風の音になる。崖を掠めて颯と吹散る木葉と共に、百按司墓の石壘が崩れて唐櫃の中から白骨が武者振ひをして立つた。白地の鎧白裝束、腰より下は朧ろなのが二十三十五十百、雲のやうに崖に靡いて流れる。白地の錦の直垂に白糸威の鎧、白木の眞弓手挾んで、白羽の征矢を負ふた後姿は、わが御曹子でなくて誰であらう。

どつと擧た鬨の聲、雲のあなたに聞えたかと、福樹に起る風の音、俄かにざわ〳〵とまた一聲、蝙蝠の鳴音がして、光ものでも渡るやうにしゆうと闇を縫ふ羽音、かなたの崖には梟の咒の聲が斷續して聞えて居る。思ひ出しても凄味のある夜であつた。

（十一） 運天海峽

こゝに運天海峽を記す事は或は爲朝に緣が無いかも知れぬ。併し運天港の形勝を說くには、是非ともまた美なる運天海峽を描かねばならぬ。

今歸仁間切が半島をなして突出し、その北端上顎の如く鈎入して、遙かに下顎をなせる羽地間切と呼應せるところ、恰かも口を開たやうな形をなし、その口の中に一杯に頰張て居るのが周圍五里弱の屋我地

島である。從つてこの屋我地島とこれを包圍せる母島との間には、運河の如き美なる海峽が形作られる。運天港はこの海峽の北端をなして居ので、海峽の長さ約五海里、これを運天海峽と稱したのは余の命名である。

運天一泊の翌二十三日午前十時、余はこの海峽の自然を探り、更に羽地に上陸して斧斤嘗て入らざるの森林に分入り、石炭紀の遺物として獨り琉球に自然林をなせる杪欏の林を訪うべく、間切役場を辭した。松の大木を刳つて作つたわが獨木舟は三人の舟夫（二人は兼荷持の人夫）とわれ等二人を乘するには恰好のものである。併し二人分の蚊帳毛布、米鹽の類を收めた行李四個を積んだので、舟の中はぎつしりと

隙間も無い。踞座をかくと兩方の膝頭が舷に觸れる。爾く狹く細長い舟なので、迂濶に立上らうものなら忽ちごろりと轉覆る。一度坐つたら身動きをせぬ覺悟で、舟夫に指圖された塲處に就く。

海峽の幅は運天の前で約四町、水の面は鏡のやうに滑らかで、氣味の惡いほど蒼く透明つて居る。この間を獨木舟で發するのは極めて趣味深い。それも前日から頼んで置いて辛く儲ひ得たほどで、われ等の出發點附近には水鳥一匹浮んで居らぬ。山も水も太古の如く靜かで、動くものと云つてはわが獨木舟の外には何ものもない。發して三四町すると、灣がそこで行詰つて左へ折曲る。その對岸の屋我地島い鼻を土俗和闌岬と稱する。今より六十年前、佛蘭西の軍艦が三四隻、この

運天に來泊して居た事があつたさうで、その際死亡した將校をこゝに葬つてあるため和蘭岬と呼ぶのだといふ。琉球の土民は今でも西洋人を見れば和蘭人と極て居るのだ。運天は元來水に乏しい地だが、奇なる事にはこゝの海の底に混々と清水の噴出る處があつて、當時佛蘭西の軍艦は長い喞筒でそれを引て飲用に供して居たといふ事を、古老は語つて居ると云つて仲村君が舟の通る時其場處を指さし示した。潮は太洋の只中で見る如き紺碧の色に湛えて、慥に二十尋からの水深を示して居る。こんな底に清水が湧て居るといふ事は一寸聞いては信じられぬが、琉球で二三の奇なる伏流及び地中湖を見た余は、この海中にも或は斷崖の底を流れて居る伏流が表はれて居るのであらうと思つ

た。

兎も角舟を和蘭岬に着て、實際墓があるのか、また墓があるとすれば文字でも刻んであるかどうかを調べて見る事にした。極めて登り難い珊瑚岩から成つた崖を攀て行くと、その半腹にやゝ平な處があつて、果してそこに琉球に目馴ぬ二個の墳墓があつた。まさしく西洋風の墓で文字まで刻んである。それは支那文字で佛文では無つたが、右方のは中央に老將貴大爾聖號云々とその名を刻み、左に大佛蘭西戰船佛助加特洛助號、右に救世千八百四十六年と錄し、左方のはこれも中央に老將撤慮聖號云々として、右に大佛蘭西戰船歌爾勿特號と乘組船名を左には同じ年號を刻んで居る。

千八百四十六年と云へばペルリが浦賀へ來た時より七年前に當る。余はそのころ何のため佛蘭西の軍艦が運天へ來たのか、頗る好奇心を挑發されたが、後で調へて見ると、その年に佛艦三隻琉球へ來て和交通商を强請した事實があつた。德川幕府へ迫るまゝに就て琉球を脅やかして居たのである。運天へ來て端なく幕末外交史の紀念に觸やうとは思ひも寄らぬ事であつた。

(十二) 神秘の境

阿蘭岬の處は幅が二町許に迫つて居るが、そこを拔るとやゝ開いて三四町の廣さに復する。行手は五六町だけ見えて居て、その行詰つた、

琉球の墳墓と石巴梯斯樹(Terminalia Cattapa, L.)

處から灣はまた屈曲するのだ。これが幾重にもなつて居るので、舟の過た跡を見ると、兩方の岸がすぐ扉のやうに合つて、宛から靈地い神聖を護るものゝ如く見ゆる。左れば舟は連續して居る幾淵かの湖水若くは川を遡るやうで、これが海の一部であらうとはどうしても思へぬ。併し水を窺くと黝然たる紺碧の色をなして、恐るべく狎るべからざる權威をその面に湛えて居る。湖水や川にこんな崇高に充た色はない。それもその筈で二十尋乃至五十尋の深さを有して居るといふ。それで福は僅かに三四町に過ぬのだ。何となく慄毛の立つところに肅然として襟を正さしむるものがある。即ち甚深の印象を與へずんば止まぬものがある。

斯の如きの光景、これ決して内地のものではない。況んやわれ等の生を托する舟は丸太を刳つたまゝの獨木舟である。まだ内地の冬なのに三人の舟夫は赤銅のやうな丸裸で物の美事に櫂を操つて居る。殊にこの狹いところに時々大きな鱶が出沒するといふに至つては、余はどうしてもハッガードの小説にある阿弗利加の川を思ひ出さずには居られなんだ。

その底に清水を湧して居やうとも、鱶を棲して居やうとも、神秘の胸に一切を包んだ水の面は、たゞ油のやうに滑かで細波だも立てぬ。わが舟の外には素より靜かな水の面を搔亂すものもない。空はこの水のやうに麗らかに晴渡つて居る。滑らかな水の上を長閑に胡蝶が渡つて行く。それは翅の眞黑な中に鮮明な綠色の方斑を有して、後翅の外緣にも淡綠色の半月紋列のある、奇麗な鳳子蝶科の黑玳瑁で、それが二匹三匹づゝ翅を並べてそこ〳〵を渡つて居る風情、繪のやうだと云ひたいが實は繪よりも奇麗だ。われ等の行手には神仙の窟でもありさうに想はれる。

右岸は奇拔な古生代の水成石灰岩より成た斷崖で、山背の露出した間に蘇鐵と琉球松が生て居る。左岸は重に珊瑚岩から成て、これにもその蝕つた岩の間に蘇鐵や阿旦が生て居る。洞窟をなして水を呑んで居るところも見ゆる。併し左岸は右岸のやうな斷崖をなして居るところは尠ない。かういふ間が一里近く續くので、風光の點から云へば支

那の赤壁に優るとも劣つて居まい。月夜などは嘸と思はれる。余はこの一帶を運天の赤壁と名けたい。

暫らくして左折すると、海峽は展開して灣となり、右岸の山は漸々岸を離れて退ぞき、左岸も徐々坦かな丘陵と化し、羽地大宜味の山々前方を遮ぎつて、こゝに大きな湖水を現出する。實際湖水ではないが湖水とほか見えぬのだ。水深も幅の擴がつたゝけそれだけ減じて、汽船ではもう進めなくなる。迫つた景色が散開するので、目先がころりと變つて了ふ。

(十三) 海水中の樹林

左岸即ち屋我地島の方はずつと遠淺になつて、われ等の舟は四五尺の深さの處を行くのである。汀には土人のあんげらと呼ぶ、身體が一尺位で嘴の長さがまた一尺ほどある奇妙な鷺のやうな鳥が數羽、頻りに餌を漁つて居る。これは風の起るのを前知して常に風蔭に廻ると知られて居る大杓鴫である。われ等は驚て舟を濱邊に寄せてそこから上陸する事とした。それは饒平名の灣内にある海水中の紅樹林を見るためで、丁度今落潮の最中であるため、そこまで舟を進め難いのと、歩いて行くと出洲を横ぎる事になつて近いからである。舟は前方に廻らせ、一人の舟夫を具して行く。

饒平名は百廿戸ほどの村で、こゝに屋我地小學校がある。余は一先

小學校に立寄た上、生徒を案内者として、紅樹林に向つた。紅樹は熱帶における鹽生植物中の最も著名なるもので、印度瓜哇等においてはその發育殊に盛んなりとして知られて居る。概して海水の灣入し波浪の少ない塲處に生長するもので、印度のものは太い氣根を分岐し、支柱狀をなして居て、その下を舟が通るといふ事である。海中の林、これ既に人の好奇心を惹くに足りる。殊にこの紅樹は所謂胎生植物と稱せられ、植物學上頗る奇なる繁殖の方法を營んで居る植物である。余は當然杪欏の林に對すると同樣の興味をこの林に寄せて居た。併し余は別に『琉球の植物』を草する筈であるから、この紅樹林の詳しい事はそれに讓つてこゝでは概觀を記すに止める。

この紅樹林へ行く途中殆んど水の無い沙濱の上で奇なる魚を見た。それは沙魚の如き形をした二三寸の小魚で、その群をなして陸上を飛歩く樣、宛かも蝗の人の跫音に飛立つに異ならぬ。それが二十、三十なら兎も角、百も二百も群をなし、雲の影が走るやうに砂を蔽ふて飛ぶに至つてはまた一個の奇觀たるを失はぬ。奇なる大杓鳴と奇なる陸上の魚、あゝこれもまた運天海峽の名物とするに足やう。

暫らくにして紅樹の林に達した。今落潮の際なので惜い事に盈潮の中に立つて居る林相を見る事は出來なかつたが、それでも林の中に踵を浪するほどの潮はあつた。見渡すところ幅三四十間、長さ三四町に亘つて、數百の紅樹が如何にも美事な純林をなして居る。併し木は餘

り大きくはない。概して二間位の高さで、端の方にあるのにまゝ三間位太さ二尺四五寸廻のがある。（入表島には三尺廻り以上のものが並んで居て、自由にその下を舟で通れるところがあるといふ）。印度のものゝやうな氣根はないが、それでも一種の氣根が面白い形をして蟠つて居る。丁度今花落から四五寸までの瓜のやうな果實即ち幼芽が累々と實つて居て、その落たのが潮に漂つて居るのもあれば、既に根を下して居るのもあり、まさにその奇なる發育の模樣を示して居る。稍離れて海上から見ると幹が黑く、暗綠色の光澤ある葉は日を受て輝き、木の高さも苅つたやうに揃つて居るので、餘程奇麗な眺めである。かくの如き樹紅の純林は植物學上寔に貴重すべきもので、また琉球に

おける植物の自然分布の狀態を存するためにも、この紅樹林は永遠に保護するの策を取りたい。また運天海嶽の一名物を存する上からも是非さうしたいものである。

（十四） 琉球の小松島

標本として紅樹の實を摘み幼芽を拔取り、この鹽生植物に辭して再び學校に歸る途次、この地のお神山の鐘乳洞に立寄つた。洞は巍然たる丘陵の間にあるので、左して大きなものではないが、太い扁平な鐘乳が色紙の紋樣のやうに垂下して居るのがなか〳〵奇觀である。併し特に余の注目を惹いたのは洞そのものよりも、二丈ほどの高さから太

い榕樹の氣根が十本ほど章魚の足のやうに八方に垂れて洞口を封じ、どれが本幹か區別し難い美事な樹容をなして居る事であつた。氣根のこれほど美事な榕樹は殆んど他に類を見ない。

學校で辨當を濟し、すぐ辭して海岸へ出るとそこには鹽濱がある。鹽濱がある位だからこの邊の海は廣々とした遠淺で、われ等の獨木舟は六七町彼方の小さな蓬萊のやうな島蔭に廻つて居る。この六七町の間潮はひた〳〵に來て居るので、塵一すぢ海草一株ない平らな砂濱の上を長閑な春の日に、ぴちや〳〵跣足で徒渉する心持は何とも云へず伸かだ。やがて負はれて舟い中へ入る。この邊は一面三四尺の遠淺でこの間に小さな島がそこ〳〵に點在して居る。いや島といふよりは巖

といふが適當であらう。どれもこれも下を剜つたやうな巖で、その上には大抵二三本の松が生えて居る。水蒸氣が多いので遠くの方の巖は松ぐるみ紫に霞んで居る。かういふ巖が大小錯落として横つて居る中を漕いで行くわれ等は、繪の中を押分て進むやうである。余は運天海峽の一部を赤壁と呼んだに對し、こゝを琉球の小松島と呼ぶ。

舟はこの間を漕進む事約一海里、左の方屋我地島から突出た洲があつて、やがて對岸の羽地に屆いて居るやうに見ゆる。程なくこの鼻のところへ來ると、方幾町かの間を眞黑に浮んで居る水禽の群がある。余はこんな驚ろくべき鳥の群を見た事がない。奇なる事には舟が近づいても逃ないで居る。だん〳〵近づく中に鴨の群と知れた。面白いの

で舟をその中へ入させる。さすがに一町ほど近づくと一度にパッと立つた。空を蔽うとはこれであらう。朝來過つて來たところの風光といひ、今またこの鴨群の悠々その生を樂しむ樣を見て、余は原始界の光景を想像せざるを得なんだ。

松島の盡るところ即ちわれ等の上陸地點である。わが運天海峽もこゝに終を告る。前には赤壁あり、後には松島あり、運天の髑髏塚、爲朝の窟、饒平名の紅樹林、鐘乳洞、この間の風光奇觀殆んど應接に遑がない、たゞ交通の便を缺くため、絶て觀光の旅客は無いが、余は他日必らずこの形勝の大いに表はるゝ日あるを信じて疑はぬ。願はくはこの日の近き未來に來るべき信憑に下に、小松島の巖には更に松を植

付て、風致を添へ（松は琉球では一年二回發芽するから短い年月の間に容易に立派なものに生長する）紅樹もまた大に保護繁殖の途を講じたい。徒らに染料の資として土人の伐採に任すが如きは最も取らざるところである。

對岸の源河には早くもわが船の近づくを認めて羽地の間切長が出迎へて居られた。今夜は間切長方に一泊し、翌日は目的の杪欏の林に分入る筈である。併し杪欏の林は全然爲朝に緣がないから、こゝには記さぬ

浦添

（一）浦添途上（上）

爲朝舜天の紀念としては琉球から浦添を逸する事は出來ぬ。浦添の名が始めて琉球に顯はれたのは爲朝がこの地の牧湊を船出した時で、更にその子舜天が浦添から起つて利勇を滅し、王位を襲ぐに及んで最も著るしくなつたのである。

舜天は幼名を尊敦と呼び、爲朝が琉球を去つてからは、母と共に浦添に住し、專ら母の養育を受て人となつたので、善く爲朝の遺志を守り、遺孤を立派なものに育てあげた彼の母も、必らずや爲朝の配た

るに恥ぬ女丈夫たり、また賢母であつたに相違ない。舜天が衆に推され浦添の按司となつたのは、彼が十五歳の時で、當時天孫氏の命令行はれず、諸按司八方に割據せる亂世であつた事を思へば、この際に擁立された彼は、啻に爲朝の忘紀念として土民の敬重を受て居たのみならず、武勇優れた異常の少年であつた事が察せられる。また浦添按司としての彼の記錄に、勵精治を圖り獄を斷じて違ふことなく、民その堵に安んじたとあるを見れば、彼は啻に武勇の猛者たるのみならず、弱冠にして既に聰察の資寛厚の德を有した長者であつた事も明かである。彼が利勇を誅し、國人に推尊されて中山に君臨したのは僅かに廿二歳の時で、爾來王位にある事實に五十年、弊政を除き國俗を改め、

いろは四十七字を敎へ、首里王城を宏にし、身は太平を致して國に文化の基礎を敷た。琉球に文字あるはこの時が始めていゝ、琉球に歷史あるもまた舜天以後である。實に琉球中興の祖で、當時遠近其德化に懷ざるものは無つたといふ。

浦添といふところは舜天を出したばかりでなく、舜天の孫義本の世にその禪を受て英祖となつた英主をも出した。英祖の後五世にして有名な察度王もまた浦添から起つて中山王となつた。かくて舜天以後殆んど三百年の間はみな浦添から起つたものが琉球の主權を握つて居たので、英雄二代の感化が永く浦添の天地に磅礴して居つた事を事實の上に證明して居る。かくの如く浦添の名は實に琉球の歷史と離す事の

出來ぬ關係を持つて居るので、余が浦添を訪ふ事に寧ろ運天以上の趣味を感じたのは決して偶然でないと信ずる。

浦添において余の訪ふべき個處は舜天の居城たりし浦添城の跡と、爲朝の船出した牧那渡とである。浦添は那覇から二里十町にしてその間切役場に達する。那覇も舊は浦添間切に屬して居たのである。首里よりは更に最も近く、その間僅かに一里强に過ぬ。余が浦添を訪ふたのは運天に遊んだよりはずつと前、二月十六日で、此時は縣廳の謝花といふ屬官が案内をして呉た。

(二二) 浦添途上 (下)

この日も例の通り草鞋穿である。琉球では二里位のところへ出かけるにも靴で行く事は出來ぬ。それは大抵地盤が凸凹の烈しい角の多い珊瑚岩から成て居るので、靴では歩行に困難な許か、雨降りには滑つて迚も歩けないのである。實際琉球節に唄はれて居る通り、草鞋を穿ねばどこへも蹈出す事は出來ぬのだ。

途中弓張月で著名な、また實際においても琉球の靈地として知られて居る辨ケ嶽へ上つたが、こゝに記す緣は無い。やがて浦添橋を渡つて浦添に入ると、俚俗ちやうつか（經塚）と稱する處の小高い松林の中に小さな碑石が立て居るが、土民は地震鎭めの石で、この石のあるためこの邊には古來嘗て地震を見ぬと稱して居る。併し向象賢の遺老

傳を見るとその中に此碑の事を記して

『首里より浦添に往くの間一高嶺あり、松樹茂密、濃陰重々、而して人烟遠く隔つ、最も幽僻の地たり、昔時此地甚だ妖怪多し、時々出沒、詐變異貌、屢々行路の人を惱ます、日暮の時人驚ろき之を悞れ、敢て往來せず、時に日秀上人あり、金剛經を小石に寫し、これを埋め碑を建て妖魔を鎭す』

とあるのを見ると、地震鎭めではなくて妖怪鎭めである。首里の阪下にも日秀上人の建て妖怪退治の梵字碑といふものがあつたが、琉球はよほど化物の多かつたところと見えると思ひながら行過る。

往來の松並木の間から、奇拔な浦添城の輪廓が朧ろに煙つて見える。

途中から小雨が降出して居たのである。馴れぬ石高道は草鞋穿でも底に當つて痛い。琉球へ來ては一日に五里歩く事が實際なか〳〵困難だ。そこへ行くと土地の人は驚いたもので、女でも小兒でも跣足のまゝ平氣で飛歩く。珊瑚岩の角が研出されてテラ〳〵と光つて居る。夫はみな琉球人の踵で研出したのである。琉球人は足の掌で釘を蹈むと釘の方が折れるといふが、實際を見ると萬更話だけではなさゝうな氣がする。

やがて浦添城下の間切役場についた。これも昔時の浦添番所をそのまゝ用ゐて居るので、大きな古巴提斯や榕樹や松の樹が構の中にある。こゝで辨當を遣つて役場の吏員を案内者に立て、浦添城に向つた。こ

の邊は地勢がよほど高まつて居て、この中腹に極樂山龍福寺といふ古刹がある。此寺は浦添の歴史に餘程關係を持つて居ると思れるから一寸記して置きたい。

全體浦添は首里よりも以前に開けたところだといふ説もあつて、それによると浦添はうらおそいの轉訛で、うらおそいはまた百浦襲の略である、即ち琉球の津々浦々を司配するといふ意に外ならぬので、首里の開かれる以前までは浦添が琉球の中心であつたといふのである。

また俗袋中の琉球神道記には琉球固有文字の發明されたところは浦添だといふ事を書いて居る。琉球の固有文字といふのは無論舜天の敎へたいろは文字以外のものであらうがどういふものを指したものかは余

には分らぬ。或は今日與那國島に存して居る如き象形文字であるかも知れぬが、兎に角固有文字の發明されたところとする一面には、琉球で最も早く開けたところであるといふ事を意味して居る。

いかさま琉球で早く開けたらしい浦添にある、この龍福寺は琉球でまた最初に出來た寺である。舜天以前一萬七千年琉球を司配して居たといふ天孫氏の廟もこの龍福寺にある。龍福寺は英祖の世に琉球に漂着した何れの國の僧とも知らぬ禪鑑和尚なるものが建立したもので（約六百五十年前）當時の名は極樂であつた。尤も場所は浦添城の西にあつたのを、歴年久しくして荒廢し、また火災の厄難等があつて尚圓王の世に今の處へ移し、名をも極樂山龍福寺と改めたのである。琉

球で格式の善い寺であるが、至つて御粗末な田舍寺だ。この寺で何か舜天に關する事を尋ねて見たが、坊主は何も知つて居らぬ。無論舊記と云ものさへも此寺には無つた。

可笑しいのは馬琴が嘗てこゝに滯在して弓張月の材料を得たといふ話が殘つて居る事である。この寺に普賢菩薩の木像があつて、製作も稚氣を帶たものであるが、菩薩の跨つて居る獅子は、夜な〳〵田畝に出て作物を荒し廻たといふ事が遺老傳に出て居る。

（三）浦添城（上）

龍福寺を出て蘇鐵の茂つた細徑を分ながら城に上つた。全體の地盤

は珊瑚岩から成つて、城の上には一面に柔かな芝が生えて居る。芝の上には紫菫菜が咲いて、その紫の中にまた琉球到る處の山野を飾つて咲く瑠璃蘐蔓が、可憐な碧瑠璃の花をつけて居る。蓮華草に似た移植々物やはた草の紅も見ゆる。蒲公英に似た黄な花もある。城砦にして草葉の綠花のいろ〳〵、繪具を打まいたやうな中を草鞋で蹈しだいて行く。小雨はとうに止んで居た。

土地が三丈四方ほど落込んで出來たやうな穴があつて、その中を狹しと一本の梯梧が穴を塞いで横に擴がつて居る。高さは二丈程であるがこれが殆んど平面とすれ〳〵である。梯梧は荳科植物の最大なるもので、またその生長の早い事は世界の樹木中に類があるまいとさへ云

はれて居る。所謂獨活の大木式であるが、極めて多肉の枝を交へた奇拔な樹容で、八重山では三月から、沖繩では四月から熱帶的植物に通有な殷紅燃ゆる如き花を着る。今は花はない。またこの穴の中の梯梧は梯梧として大きなものでも何でもない。たゞ面白いひねくれた特殊の木振が穴を一杯に塞いで居るので、宛ら穴の中に封じ込られて居るやうな處に、なぜか人を惹つける趣がある。穴から頭の先だけを出して蹲まつた巨人を見つけて、そんなところに何をして居るのかと不審を打たいやうに、余はこの梯梧がなぜそんなところに生えてるのかとひどく好奇心を動かされた。

梯梧の心理を研究するつもりでも無かつたが、穴を下て行つて見る

と、上からは枝や葉で見えなかつた大きな洞窟が横手にある。入口には水が垂れて居つたが、少し下ると畳二十程の廣さになつて、また横に外れてだん〳〵落込み、後は眞闇で分らぬ。この穴が昔城の抜道であつたといふ事を聞いて居ると役場員の説明に、さてはこの梯梧も無益に穴の中に生たのではない、滅びた城の間道を長へに護るつもりで枝葉を茂らして居るのであらうと思ふ。

城の上は樹木も何もなく芝と草と生えてる間に、ところ〴〵蘇鐵がある位で、まゝ壘壁が草の中に崩れて居る。東北の二面は悪崖をなし、石壘が尙存して居るが、城上の眺望は明媚秀麗を極めて居る。今余等の立つたところは城の北西端で本島の西海岸と相對する位置にある。

左に入込んで見ゆるのが北谷灣で、その沿海は例の珊瑚礁より成る海岸にのみ見得べき、鮮明な翡翠玉の色を湛えて、外洋の黑ずんだ紺碧の色と劃然たる色分をなして居る。北谷灣の手前小さな川が流れ込んで更に一小灣をなし、海岸珊瑚礁の露出して居る丘陵に、松の生て居るところ乃ち牧湊で、爲朝が舜天母子を殘して船出した遺跡である。北谷灣を隔てゝ遠く海中に斗出して居るのが殘波岬、蜒蜿連亘して居る山系の間に座喜味、山田、中城等の古城址を指點する事が出來る。

歩を東端に轉ずると、崖に臨んだ物見櫓の跡があつて、そこへ登ると風景はまたがらりと變る。即ちこゝからは本島の東海岸を併せ見る事が出來るので、中城灣はすぐ眼の下に展開し、渺々たる太平洋は煙

波無限に連つて霞の末に消て居る。眞南には崔嵬たる首里城の輪廓、やゝ西にそれて鬱蒼たる辨ケ岳の山容、それを隔てゝは出船入船の、手に取るやうな那覇の港、那覇の町、手前には幾多の丘陵が波のやうに起伏して居る。那覇港の前面には蓬萊のやうな形をして慶良間諸島が霞の中に彷彿と浮んで居る。自分は琉球へ來て以來この島の姿を見るたびにどれほど憧れて居たらう。琉球諸島には野猪を除いては兎も狐も狸もその他の野獸何一匹居らぬのに、どういふ由來があるのか、この慶良間にだけは鹿が居て、太古のまゝのこばの原生林さへあると聞いて居るばかりか、琉球へ來る時この島蔭で澤山の鯨が尾を振ひ潮を吹いて遊んで居たのを見た自分は、いよ〳〵人寰以外の島のやうな

氣がして、慶良間を懷しいものに思ひしめて居たのである。いふまでもなく浦添に遊んだ時は離島廻りをせぬ前であつた。

かういふ美くしい眺望は內地には殆んど類を見る事は出來ない。併し浦添城を奇ならしむるものは、寧ろこれ等の風景ではなくて、城の東北兩面に當り、斷崖の下を圍繞して峙だつ磷峋の珊瑚巖である。殊に遠方からの目標となつて居るのは城の東端、即ち物見の懸崖と併行して、物見跡よりヨリ高く削り上たやうに立つて居る四丈あまりの巨巖で、その形を見ると丁度巨人が首里城を睨んで蹈反返つて居るやうである。この巨人の身體を長へに縛やうとするかの如くに、巖の途中に生た小さな榕樹が眞白の根を十重二十重に卷つけて居る。背に腹

に腰に頭に蘇鐵が房々とその葉を茂らして居る。頭にあるのは阿非利加人が駝鳥の羽を着て居るやうで、この巨人を飾るに相應しい。

(四) 浦添城 (下)

この巨巖の左右から城の北西にかけ、垂直線に削り下たやうな斷崖の下には、大小幾多の珊瑚巖が錯落として横つて居る。大なるものは懸崖と高さを爭はんとし、小なるものもなほ虎や牛の大きさに讓らぬ。その蝕つた穴だらけの、支那畫に見る太古石を更に腐蝕せしめたやうなのが、幾百年の雨打風餐に石炭のやうに黑ずみ、或は及の缺た古劒を並べ植たやうに峙つてるのが、觸らばその及のぼろ〳〵と滾れ

落そうに見ゆるのもある。或は巨大の海綿を水に浸して轉がしたやうなのもある。或は自然に古塔の形をなしたのもある。動物の形に見ゆるの、家の形に見ゆるのなどもある。そして巖としてみな蔓や蘚苔の封じ且つ蘇鐵の生えて居ないのは無い。

蘇鐵はわが日本に特產する植物で、その化石は既に石炭紀の上層に發見され、二疊紀三疊紀に榮えてその後歐亞大陸に滅びた古代植物の一である。日本の蘇鐵はその遺蘖の唯一のもので、この植物の自生區域は大隅の最南端佐多岬から、琉球群島の南端までに限られて居る。即ち琉球がこの貴重なる植物の本場て、群島山野の風致は到るところの蘇鐵を以て美化されて居るが、別して珊瑚巖に蘇鐵の生えた風情は

全く繪畫的でまた琉球的である。然り、琉球以外では世界のいづこにも見られぬ特殊のものである。而もこの浦添城の落々たる珊瑚巖上一として蘇鐵を見ざる無きは慥に奇觀たるを失はぬ。殊にその蘇鐵も内地に見られぬ艶やかな葉色を示し、如何にも美事に繁茂して居るので、見るからに旅客の眼を爽やかならしめる。

一寸こゝで思ひ出したから書添へて置くが、蘇鐵のみには限らぬ、琉球では路傍の草木までが内地と違つて氣持の善いほど蒼いのは、一ツは熱帶的特色でもあらうが、一ッは空氣中に塵の少ないにもよる。珊瑚礁の碎けて成る道路からは如何な大風の日でも砂埃を立る事は無い。曩に第六回内國博覽會に琉球人が團體を組で見物に來たが、そ

の時一番困つたのは風の日に砂ほこりの立つ事で、風が吹いて來ると彼等は何しても歩けずに雜沓の往來に立止つて仕舞うので、附添の内地人がひどく難儀をしたといふ事が今も琉球に話の種に殘つて居る。かういふ風に空氣中に塵もなければ無論文明的の煤煙などもなく、而も水蒸氣の多い琉球に育つ植物は、植物界の幸福なるものと云はねばならぬ。

廻れば珊瑚巖のある處へ下られるといふので、余等は城の南手に廻つた。やゝ下つたところに岩石が蔽ひかゝり、栴檀の生えて居る下に大きな洞穴がある。その周圍は綺麗な高麗芝に鎖され、一寸庭先にでも來たやうな感を起させる。こゝをだん〳〵下つて行くとその邊には